

※ [#「さんずい+ (壱-土へん-厂)」、第3水準1-87-25] 東綺譚

永井荷風

青空文庫

わたくしは殆ど活動写真を見に行つたことがない。

おぼろ気な記憶をたどれば、明治三十年頃でもあろう。神田錦^に

町^{しぎちよう}に在つた貸席錦輝館で、サンフランシスコ市街の光景を写

したものを見たことがあつた。活動写真という言葉のできたもの

恐らくはその時分からであらう。それから四十余年を過ぎた^{こんに}今

日^ちでは、活動^{ことば}という語は既にすたれて他のものに代^{かえ}られている

らしいが、初めて耳にしたものの方が口馴れて言いやすいから、

わたくしは依然としてむかしの廢語をここに用いる。

震災の後、わたくしの家に遊びに来た青年作家の一人が、時勢におくれるからと言つて、無理やりにわたくしを赤坂溜池ためいけの活動小屋に連れて行つたことがある。何でも其頃その非常に評判の好いものであつたというが、見ればモオパッサンの短篇小説を脚色したものであつたので、わたくしはあれなら写真を見るにも及ばない。原作をよめばいい。その方がもつと面白いと言つたことがあつた。

然し活動写真は老弱ろうじやくの別なく、今の人の喜んでこれを見て、日常の話柄わへいにしているものであるから、せめてわたくしも、人が何の話をしているのかと云うくらいの事は分るようにして置きたいと思つて、活動小屋の前を通りかかる時には看板の画と名題と

には勉めて目を向けるように心がけている。看板を一瞥すれば写真を見ずとも脚色の梗概も想像がつくし、どういう場面が喜ばれているかと云う事も会得せられる。

活動写真の看板を一度に最多く一瞥する事のできるのは浅草公園である。ここへ来ればあらゆる種類のものを一ト目に眺めて、おのずから其巧拙をも比較することができる。わたくしは下谷浅草の方面へ出掛ける時には必ず思出して公園に入り杖を池の縁に曳く。

夕風も追々寒くなくなって来た或日のことである。一軒々々入口の看板を見尽して公園のはずれから千束町へ出たので。右の方は言問橋左の方は入谷町、いずれの方へ行こうかと思案し

ながら歩いて行くと、四十前後の古洋服を着た男がいきなり横合から現れ出て、

「檀那^{だんな}、御紹介しましょう。いかがです。」と言う。

「イヤありがとう。」と云つて、わたくしは少し歩調を早めると、「絶好のチャンスですぜ。猟奇的ですぜ。檀那。」と云つて尾いて来る。

「いらぬ。吉原へ行くんだ。」

ほん引^{ひき}と云うのか、源氏というのかよく知らぬが、とにかく怪し気な勧誘者を追払うために、わたくしは口から出まかせに吉原へ行くと言つたのであるが、行先の定^{さだま}らない散歩の方向は、却^{かえつ}てこれがために決定せられた。歩いて行く中^{うち}わたくしは土手下の裏

町に古本屋を一軒知つてゐることを思出した。

古本屋の店は、山谷堀さんやぼりの流が地下の暗渠あんきよに接続するあたり

から、大門前おおもんまえ日本堤にほんづつみ橋のたもとへ出ようとすする薄暗い裏通

に在る。裏通は山谷堀の水に沿うた片側町で、対岸は石垣の上に

立続く人家の背面に限られ、此方こなたは土管、地瓦ちがわら、川土、材木な

どの問屋が人家の間に稍やや広い店口を示しているが、堀の幅の狭く

なるにつれて次第に貧まずしげ気な小家こいえがちになつて、夜は堀にかけら

れた正しょうほう法寺橋じぼし、山谷橋さんやぼし、地方橋じかたぼし、髪洗橋かみあらいぼしなどいう橋

の灯ひがわずかに道を照すばかり。堀もつき橋もなくなると、人通

りも共に途絶えてしまう。この辺で夜も割合におそくまで灯あかりをつ

けている家は、かの古本屋と煙草を売る荒物屋ぐらいのものであ

ろう。

わたくしは古本屋の名は知らないが、店に積んである品物は大抵知っている。創刊当時の文芸倶楽部クラブか古いやまと新聞の講談附録でもあれば、意外の掘出物だと思わなければならぬ。然しわたくしがわざわざ廻り道までして、この店をたずねるのは古本のためではなく、古本を鬻ぐ亭主の人柄と、廓くるわ外の裏町という情味との為である。

あるじ主人は頭を綺麗に剃そった小柄の老人。年は無論六十を越している。その顔立、物腰、言葉使から着物の着様に至るまで、東京の下町生きつすい粋の風俗を、そのまま崩さずに残しているのが、わたくしの眼には稀覯きこうの古書よりも寧むしろ尊くまた懐しく見える。震災の

ころまでは芝居や寄席よせの楽屋に行くと一人や二人、こういう江戸下町の年寄に逢うことができた——たとえば音羽屋おとわの男衆おとこしゅの留とめじい爺やだの、高嶋屋の使っていた市蔵などという年寄達であるが、今はいずれもあの世へ行ってしまった。

古本屋の亭主は、わたくしが店先の硝子戸ガラスをあける時には、いつでもきまつて、中仕切なかじきりの障子際ぎわにきちんと坐り、円い背を少し斜に外の方へ向け、鼻の先へ落ちかかる眼鏡をたよりに、何か読んでいる。わたくしの来る時間も大抵夜の七八時ときまつているが、その度毎に見る老人としよりの坐り場所も其の形も殆どきまつている。戸の明く音に、折かがんだまま、首だけひよいと此方こなたへ向け、「おや、入らっしゃいます。」と眼鏡をはずし、中腰になつ

て坐布団の塵をぽんと叩き、匍うような腰付で、それを敷きのべながら、さして丁寧ていねいに挨拶をする。其言葉も様子もまた型通りに變りがない。

「相変らず何も御在ございません。お目にかけるようなものは。そうそ
うたしか芳譚ほうたん雑誌がありました。揃そろつちや居りませんが。」

「為ためながしゆんこう 永春江の雑誌だろう。」

「へえ。初号がついて居りますから、まアお目にかけられます。
おや、どこへ置いたかな。」と壁際に積重ねた古本の間から合がっぽ
本五六冊を取出し、両手ではたはた塵をはたいて差出すのを、
わたくしは受取つて、

「明治十二年御届としてあるね。この時分の雑誌をよむと、生命いのち

が延のびるような気がするね。魯文珍報も全部揃ったのがあつたら欲しいと思つているんだが。」

「時々出るにや出ますが、大抵ばらばらで御在ましてな。檀那、花月新誌はお持合せでいらつしやいますか。」

「持っています。」

硝子戸の明く音がしたので、わたくしは亭主と共に見返ると、これも六十あまり。頬のこけた禿はげ頭あたまの貧相な男が汚れた縞しまの風呂敷包を店先に並べた古本の上へ卸しながら、

「つくづく自動車はいやだ。今日はすんでの事に殺されるところさ。」

「便利で安くつてそれで間違いないなんて、そんなものは滅多

にないよ。それでも、お前さん。怪我アしなさらなかつたか。」

「お守まもりが割れたおかげで無事だった。衝突したなア先へ行くバスと円タクだが、思出してもぞつとするね。実は今日鳩はとヶ谷やの市いちへ行つたんだがね、妙な物を買つた。昔の物はいいね。さし当り捌はけくち口くちはないんだが見るとつい道楽がしたくなる奴さ。」

禿頭は風呂敷包を解き、女物らしい小紋ひとえの単衣ひとえと胴どうぬき拔ぬきの長襦じゆ袷ゆばんを出して見せた。小紋は鼠地の小浜ちりめん、胴そで拔ぬきの袖そでにした友禪染ちよつとも一寸ちよつと変つたものではあるが、いずれも維新前後のものらしく特に古代という程の品ではない。

然し浮世絵肉筆物の表装とか、近頃はやる手文庫うちばの中張りとか、又草双紙くさごうしの帙ちつなどに用いたら案外いいかも知れないと思つたの

で、其場の出来心からわたくしは古雑誌の勘定をするついでに胴抜の長襦袢一枚を買取り、坊主頭の亭主が芳譚雑誌の合本と共に紙包にしてくれるのを抱えて外へ出た。

日本堤を往復する乗合自動車に乗るつもりで、わたくしは暫く大門前の停留場に立っていたが、流しの円タクに声をかけられるのが煩いので、もと来た裏通へ曲り、電車と円タクの通らない薄暗い横町を^{えら}折み折み歩いて行くと、忽ち樹の間から言問橋の灯^{あかり}が見えるあたりへ出た。川端の公園は物騒だと聞いていたので、川の岸まででは行かず、電燈の明るい小径^{こみち}に沿うて、鎖の引廻してある其上に腰をかけた。

実は此方^{こっち}への来がけに、途中で食^{しよく}麵^{パン}麩と罐^{かん}詰^{づめ}とを買い、風

呂敷へ包んでいたので、わたくしは古雑誌と古着とを一つに包み直して見たが、風呂敷がすこし小さいばかりか、堅い物と柔いものとはどうも一緒にはうまく包めない。結局雑誌だけは外套がいたうのかくしに収め、残の物を一つにした方が持ちよいかと考えて、芝生の上に風呂敷を平たいらにひろげ、頻しきりに塩梅あんばいを見ていると、いきなり後うしろの木蔭から、「おい、何をしているんだ。」と云いさま、サアベルの音と共に、巡査が現れ、猿臂えんぴを伸してわたくしの肩を押えた。

わたくしは返事をせず、静に風呂敷の結目むすびめを直して立上ると、それさえ待どしいと云わぬばかり、巡査は後からわたくしの肱ひじを突き、「其方そっちへ行け。」

公園の小徑をすぐさま言問橋きわの際に出ると、巡査は広い道路の向側に在る派出所へ連れて行き立番の巡査にわたくしを引渡したまま、いそが急しそうにまた何処どこへか行つてしまった。

派出所の巡査は入口に立つたまま、「今時分、何処から来たんだ。」と尋問に取りかかった。

「向むこうの方から来た。」

「向どっちの方とは何方の方だ。」

「堀の方からだ。」

「堀とはどこだ。」

「真土山まつちやまの麓ふもとの山谷堀という川だ。」

「名は何と云う。」

「おおえただす

「大江匡。」と答えた時、巡査は手帳を出したので、「ただすはこ

に王の字をかきます。一タビ天下ヲ匡スと論語にある字です。」

巡査はだまれと言わぬばかり、わたくしの顔をにらみ、手を伸し

ていきなりわたくしの外套の釦をぼたんはずし、裏を返して見て、

「記号しるしはついていないな。」つづいて上着の裏を見ようとする。

「記章しるしとはどう云う記章です。」とわたくしは風呂敷包を下に置

いて、上着と胸着チヨツキの胸を一度にひろげて見せた。

「住所は。」

「麻布区御筈筒町一丁目六番地。」おたんすまち

「職業は。」

「何なんにもしていません。」

「無職業か。年はいくつだ。」

つちのとう

「己の卯です。」

「いくつだよ。」

「明治十二年己の卯の年。」それきり黙っていようかと思つたが、
後あとがこわいので、「五十八。」

「いやに若いな。」

「へへへへ。」

「名前は何と云つたね。」

「今言いましたよ。大江匡。」

「家族はいくたりだ。」

「三人。」と答えた。実は独身であるが、
今こんにち日までの経験で、

事実を云うと、いよいよ怪しまれる傾かたむきがあるので、三人と答えたのである。

「三人と云うのは奥さんと誰だ。」 巡査の方がいい様に解釈してくれる。

「かか鼻アとばばア。」

「奥さんはいくつだ。」

一寸窮こまつたが、四五年前まで姑しぼらく関係のあつた女の事を思出して、「三十一。明治三十九年七月十四日生ひのえうま 丙 午 ……。」

若もし名前をきかれたら、自作の小説中にある女の名を言おうと思つたが、巡査は何なんにも云わず、外套や背広のかくしを上から押え、

「これは何だ。」

「パイプに眼鏡。」

「うむ。これは。」

「罐詰。」

「これは、紙入だね。鳥渡^{ちよつと}出して見せたまえ。」

「金がはいって居ますよ。」

「いくら這入^{はい}っている。」

「サア二三十円もありましたよかな。」

イブル
「巡査は紙入を抜き出したが中は改めずに電話機の下に据えた卓^テ子の上に置き、「その包は何だ。こっちへ這入ってほどいて見

せたまえ。」

風呂敷包を解くと紙につつんだ麵麩と古雑誌まではよかつたが、
胴抜の艶なまめかしい長襦袢の片袖がだらりと下るや否や、
巡査の態度と語調とは忽たちまち一変して、

「おい、妙なものを持っているな。」

「いや、はははははは。」とわたくしは笑い出した。

「これア女のきるもんだな。」巡査は長襦袢を指先につま摘み上げて、
燈火にかざしながら、わたくしの顔を睨み返して、「どこから持
つて来た。」

「古着屋から持って来た。」

「どうして持って来た。」

「金を出して買った。」

「それはどこだ。」

「吉原の大門前。」

「いくらで買った。」

「三円七十銭。」

巡査は長襦袢を卓子の上に投捨てたなり黙つてわたくしの顔を見ているので、大方警察署へ連れて行つて豚箱へ投込むのだろうと、初はじめのようにならかう勇氣がなくなり、此方こつちも巡査の様子を見詰めていると、巡査はやはりだまつたままわたくしの紙入を調べ出した。紙入には入れ忘れたまま折目の破れた火災保険の仮証書と、何かの時に入用であつた戸籍抄本に印鑑証明書と実印とが這入っていたのを、巡査は一枚々々静にのべひろげ、それから実印

を取つて篆刻てんこくした文字を燈火あかりにかざして見たりしている。大分暇がかかるので、わたくしは入口に立つたまま道路の方へ目を移した。

道路は交番の前で斜に二筋に分れ、その一筋は南千住、一筋はしらひげばし白髯橋の方へ走り、それと交叉して浅草公園裏の大通が言問橋を渡るのので、交通は夜になつてもなかなかひんばん頻繁であるが、どういふことか、わたくしの尋問されるのを怪しんで立止る通行人は一人もない。向側の角のシャツ屋では女房らしい女と小僧とがこつちを見ていながら更に怪しむ様子もなく、そろそろ店をしまいかけた。

「おい。もういいからしまいたまえ。」

「別に入用なものでもありませんから……。」「しづ呟やきながらわたくしは紙入をしまい風呂敷包をもとのように結んだ。

「もう用はありませんか。」

「ない。」

「御苦労さまでしたな。」わたくしは巻煙草も金口のウエストミンスターにマツチの火をつけ、かおり薫だけでもかいで置けと云わぬばかり、けむり烟を交番の中へ吹き散して足の向くまま言問橋の方へ歩いて行つた。後で考えると、戸籍抄本と印鑑証明書とがなかつたなら、大方その夜は豚箱へ入れられたに相違ない。一体古着は気味のわるいものだ。古着の長襦袢がた崇りそこねたのである。

二

「失^{しつそう}踪」と題する小説の腹案ができた。書き上げることができたなら、この小説はわれながら、さほど拙劣なものでもあるまいと、幾分か自信を持っているのである。

小説中の重要な人物を、種^{たねだじゆんべい}田順平という。年五十余歳、私立中学校の英語の教師である。

種田は初婚の恋女房に先立たれてから三四年にして、^{つこ}継^{けい}妻^{さい}光子^{みつこ}を迎えた。

光子は知名の政治家某^{なにがし}の家に雇われ、夫人付の小間使となったが、主人に欺かれて身重になった。主家では其^{その}執事遠藤某をして

後の始末をつけさせた。其条件は光子が無事に産をしたなら二十個年子供の養育費として毎月五拾円を送る。其代り子供の戸籍については主家では全然与り知ら^{あずか}ない。又光子が他へ嫁^かする場合に相当の持参金を贈ると云うような事であつた。

光子は執事遠藤の家へ引取られ男の児を産んで六十日たつか経たぬ中^{うち}やはり遠藤の媒^{なかだち}介で中学校の英語教師種田順平なるもの後妻となつた。時に光子は十九、種田は三十歳であつた。

種田は初めの恋女房を失つてから、薄給な生活の前途に何の希望をも見ず、中年に近く^{ちかづ}に従つて元氣のない影のような人間になつていたが、旧友の遠藤に説きすすめられ、光子母子^{おやこ}の金にふと心が迷つて再婚をした。其時子供は生れたばかりで戸籍の手續も

せずにあつたので、遠藤は光子母子の籍と一緒に種田の家に移した。それ故のち後になつて戸籍を見ると、種田夫婦は久しく内縁の關係をつづけていた後、長男が生れた為、初めて結婚入籍の手續をしたもののように思われる。

二年たつて女の児が生れ、つづいて又男の児が生れた。

表向は長男で、実は光子の連子つれこになる為ためとし、年が丁年になつた時、多年秘密の父から光子の手許てもとに送られていた教育費が途絶えた。

約束の年限が終つたばかりではない。実父は先年病死し、其夫人もまたつづいて世を去つた故である。

長女芳子と季兒すえこ為ためあき、秋の成長するに従つて生活費は年々多くなり、種田は二三軒夜学校を掛持ちして歩かねばならない。

長男為年は私立大学に在学中、スポーツマンとなって洋行する。妹芳子は女学校を卒業するや否や活動女優の花形となった。

継妻光子は結婚当時は愛くるしい円顔であつたのがいつか肥満した婆はばとなり、日蓮宗に凝りかたまつて、信徒の団体の委員に挙げられている。

種田の家は或時は宛さなら講中の寄合所、或時は女優の遊び場、或時はスポーツの練習場もよろしくと云う有様。その騒さわしさには台所にも鼠が出ないくらいである。

種田はもともと気の弱い交際嫌いな男なので、年を取るにつれて家内の喧騒には堪えられなくなる。妻子の好むものは悉ことごとく種田の好まぬものである。種田は家族の事については勉めて心を留め

ないようにした。おのれの妻子を冷眼に視るのが、気の弱い父親のせめてもの復讐ふくしゅうであつた。

五十一歳の春、種田は教師の職を罷やめられた。退職手当を受取つた其日、種田は家にかえらず、跡をくらましてしまった。

是これより先、種田は嘗かつて其家に下女奉公に來た女すみ子と偶然電車の中で邂逅かいこうし、其女が浅草駒形町あさくさこまがたまちのカフェーに働いてゐる事を知り、一二度おとずれてビールの酔を買つた事がある。

退職手当の金をふところにした其夜である。種田は初て女給すみ子の部屋借をしているアパートに行き、事情を打明けて一晩泊めてもらつた……。

*

*

*

それから先どういう風に物語の結末をつけたらいいものか、わたくしはまだ定案を得ない。

家族が搜索願を出す。種田が刑事に捕えられて説諭せられる。中年後に覚えた道楽は、むかしから七ツ下りの雨に譬えられてい
るから、種田の末路はわけなくどんなにでも悲惨にすることが出
来るのだ。

わたくしはいろいろに種田の墮落して行く道筋と、其折々の感
情とを考えつづけている。刑事につかまって拘こういん引されて行く時
の心持、妻子に引渡された時の当惑と面目なさ。其身になつたら

どんなものだろう。わたくしは山谷の裏町で女の古着を買った帰り道、巡査につかまり、路端の交番で厳しく身元を調べられた。

この経験は種田の心理を描写するには最も都合の好い資料である。

小説をつくる時、わたくしの最も興を催すのは、作中人物の生活及び事件が開展する場所の選択と、その描写とである。わたくしは^{しばしば}屢人物の性格よりも背景の描写に重きを置き過るような^{あやまち}誤に陥ったこともあった。

わたくしは東京市中、古来名勝の地にして、震災の後新しき町が建てられて全く旧観を失った、其状況を描写したいが為に、種田先生の潜伏する場所を、本所か深川か、もしくは浅草のはずれさなくば、それに接した旧郡部の^{ろうこう}陋巷に持つて行くことにした。

これまで折々の散策に、砂町や亀井戸や、小松川、寺島町てらじままちあ
 たちの景況には大略通じているつもりであったが、いざ筆を着け
 ようとすると、にわか俄に観察の至らない気がして来る。曾かつて、（明治
 三十五六年の頃）わたくしは深川洲崎すさきゆうかく遊廓の娼妓を主題にして
 小説をつくった事があるが、その時これを読んだ友人から、「洲
 崎遊廓の生活を描写するのに、八九月頃の暴風雨や海嘯つなみのことを
 写さないのは杜撰ずさんの甚はなはだしいものだ。作者先生のお通いなすった甲き
のえねろう子楼の時計台が吹倒されたのも一度や二度のことではなからう
 。」と言われた。背景の描写を精細にするには季節と天候にも
 注意しなければならぬ。例えばラフカジオ、ハーン先生の名著
 チタ或はユーマの如くに。

六月末の或夕方である。梅雨ばいうはまだ明けてはいないが、朝から好く晴れた空は、日の長いころの事で、夕飯をすましても、まだたそがれようともしない。わたくしは箸はしを攔おくと共にすぐさま門を出いで、遠く千住せんじゆなり亀井戸なり、足の向く方へ行つて見るつもりで、一先電車ひとまずで雷門かみなりもんまで往くと、丁度折好く来合せたのは寺島玉の井としてある乗合自動車である。

吾妻橋あづまばしをわたり、広い道を左に折れて源森橋げんもりばしをわたり、真直に秋葉神社の前を過ぎて、またしばらく行くと車は線路の踏切でとまった。踏切の両側には柵さくを前にして円タクや自転車が幾輛とななく、貸物列車のゆるゆる通り過るのを待っていたが、歩く人は案外少く、貧家の子供が幾組となく群むれをなして遊んでいる。降りて

見ると、白髯橋から亀井戸の方へ走る広い道が十文字に交錯している。ところどころ草の生えた空地あきちがあるのと、家並やなみが低いので、どの道も見分みわけのつかぬほど同じように見え、行先はどこへ続くのやら、何となく物淋しい気がする。

わたくしは種田先生が家族を棄てて世を忍ぶ処を、この辺の裏町にして置いたら、玉の井の盛場さかりばも程近いので、結末の趣向をつけるにも都合がよからうと考え、一町ほど歩いて狭い横道へ曲って見た。自転車も小脇に荷物をつけたものは、摺すれちがう事が出来ないくらいな狭い道で、五六歩行くごとに曲っているが、両側とも割合に小綺麗な耳門くぐりもんのある借家が並んでいて、勤先からの帰りとも見える洋服の男や女が一人二人ずつ前後して歩いて

行く。遊んでゐる犬を見ても首環に鑑札がつけてあつて、左程汚きたならしくもない。忽たちまちにして東武鉄道玉の井停車場の横手に出た。

線路の左右に樹木の鬱然と生おいしげ茂しげった広大な別荘らしいものがある。吾妻橋からここに来るまで、このように老樹の茂林もりんをなした処は一箇所もない。いずれも久しく手入をしないと見えて、匍はいのぼる蔓草つるくさの重さに、竹藪たけやぶの竹の低くしなつてゐるさまや、溝際どぶぎわの生垣に夕顔の咲いたのが、いかにも風雅に思われてわたくしの歩みを引ひきとど止めた。

むかし白髯さまのあたりが寺島村だという話をきくと、われわれはすぐに五代目菊五郎の別荘を思出したものであるが、今日こんにちたまたまこの処にこのような庭園が残つたのを目にすると、そぞ

ろに過ぎ去った時代の文雅を思起さずには居られない。

線路に沿うて売貸地の札を立てた広い草原が鉄橋のかかった土手際に達している。去年頃まで京けいせい成電車の往復していた線路の跡で、崩れかかった石段の上には取払われた玉の井停車場の跡が雑草に蔽おほわれて、此方こなたから見ると城址しろあとのような趣をなしている。わたくしは夏草をわけて土手に登って見た。眼の下には遮さへぎるも

のものなく、今歩いて来た道と空地と新開の町とが低く見渡されるが、土手の向側は、トタン葺ぶきの陋屋ろうおくが秩序もなく、端はてしもなく、ごたごたに建て込んだ間から湯屋の烟突えんとつが屹きつりつ立して、その頂ななようかきに七八日頃の夕月が懸っている。空の一方には夕榮ゆうばえの色が薄く残っていないながら、月の色には早くも夜らしい輝きができ、ト

タン葺の屋根の間々からはネオンサインの光と共にラデイオの響が聞え初める。

わたくしは脚あしもと下の暗くなるまで石の上に腰をかけていたが、

土手下の窓々にも灯がついて、むさくるしい二階の内なかがすっかり見下されるようになったので、草の間に残った人の足跡を辿たどって土手を降りた。すると意外にも、其処はもう玉の井の盛場を斜に貫く繁華な横町の半なかほど程で、ごたごた建て連った商店の間の路地口には「ぬけられます」とか、「安全通路」とか、「京成バス近道」とか、或は「オトメ街」或は「賑にぎわい本ほん通どおり」など書いた灯がついている。

大分その辺を歩いた後、わたくしは郵便箱の立っている路地口

の煙草屋で、煙草を買い、五円札の剩錢つりを待っていた時である。突然、「降ってくるよ。」と叫びながら、白い上ツ張を着た男が向側のおでん屋らしい暖簾のれんのかげに馳かけ込むのを見た。つづいて割烹着かつぼうぎの女や通りがかりの人がばたばた馳かけ出す。あたりが俄に物氣立ものけだつかと見る間もなく、吹落る疾風よしずに葭簣よしずや何かの倒れる音がして、紙屑ごみと塵芥ごみとが物の怪けのように道の上を走つて行く。やがて稲妻が鋭く閃ひらめき、ゆるやかな雷らいの響につれて、ポツリポツリと大きな雨の粒が落ちて来た。あれほど好く晴れていた夕方の天気は、いつの間にか変つてしまったのである。

わたくしは多年の習慣で、傘かさを持たずに門を出ることは滅多にない。いくら晴れていても入梅中のことなので、其日も無論傘と

風呂敷とだけは手にしていたから、さして驚きもせず、静にひろげる傘の下から空と町のさまとを見ながら歩きかけると、いきなり後方から、うしろ「檀那、そこまで入れてつてよ。」といいさま、傘の下に真白な首を突込んだ女がある。油の匂においで結ったばかりと知られる大きな潰島田つぶしには長目に切った銀糸ぎんしをかけている。わたくしは今方通りがかりに硝子戸ガラスを明け放した女髪結かみゆいの店のあつた事を思出した。

吹き荒れる風と雨とに、結立ゆいたての鬘まげにかけた銀糸の乱れるのが、いたいたしく見えたので、わたくしは傘をさし出して、「おれは洋服だからかまわない。」

実は店つづきの明い燈火に、さすがのわたくしも相合傘あいあいがさには

少しく恐縮したのである。

「じゃ、よくつて。すぐ、そこ。」と女は傘の柄につかまり、片手に浴衣ゆかたの裾すそを思うさままくり上げた。

三

稻妻がまたぴかりと閃き、雷がごろごろと鳴ると、女はわざとらしく「あら」と叫び、一ひとあしお歩後れて歩こうとするわたくしの手を取り、「早くさ。あなた。」ともう馴れ馴れしい調子である。「いいから先へお出で。ついて行くから。」

路地へ這入ると、女は曲るたび毎に、迷わぬようにわたくしの

方に振返りながら、やがて溝どぶにかかった小橋をわたり、軒並一帯に葭簣よしずの日蔽ひおいをかけた家の前に立留った。

「あら、あなた。大変に濡れちまったわ。」と傘をつぼめ、自分のものよりも先に掌てのひらでわたくしの上着しずくの雫を払う。

「ここがお前の家うちか。」

「拭ふいて上げるから、寄よっちていらっしやい。」

「洋服だからいいよ。」

「拭ふいて上げるっていうのにさ。わたしだってお礼がしたいわよ。」

「どんなお礼だ。」

「だから、まアお這入こんなさい。」

かみなり

雷の音は少し遠くなつたが、雨は却て礫を打つように一層激しく降りそそいで来た。軒先に掛けた日蔽の下に居ても跳上る飛沫の烈しさに、わたくしはとやかく言う暇もなく内へ這入つた。荒い大阪格子を立てた中仕切へ、鈴のついたリボンの簾が下げである。其下の上あがりがまちがまちに腰をかけて靴を脱ぐ中に女は雑巾で足をふき、端折つた裾もおろさず下座敷の電燈をひねり、

「誰もいないから、お上んなさい。」

「お前一人か。」

「ええ。昨夜まで、もう一人居たのよ。住替すみかえに行つたのよ。」

「お前さんが御主人かい。」

「いいえ。御主人は別の家よ。うち玉の井館ツて云う寄席よせがあるでし

よう。その裏に住宅すまいがあるのよ。毎晩十二時になると帳面を見にくるわ。」

「じやアのん気だね。」わたくしはすすめられるがまま長火鉢の側そばに坐り、立膝たてひざして茶を入れる女の様子を見やった。

年は二十四五にはなっているであろう。なかなかいい容貌きりようである。鼻筋の通った円顔は白粉おしろい焼やけがしているが、結立ゆいたての島田じまの生際はえぎわもまだ抜上ぬけあがってはいない。黒目勝の眼の中も曇くもつていず唇や歯ぐきの血色を見ても、其健康はまださして破壊されても居ゐないように思われた。

「この辺は井戸か水道か。」とわたくしは茶を飲む前に何気なく尋ねた。井戸の水だと答えたら、茶は飲む振りをして置く用意で

ある。

わたくしは花柳病よりも寧^{むしろ}チブスのような伝染病を恐れている。肉体的よりも夙^{はや}くから精神的廢人になつたわたくしの身には、花柳病の如き病勢の緩慢なものは、老後の今日、さして気にはならない。

「顔でも洗うの。水道なら其^{そこ}処にあるわ。」と女の調子は極めて気軽である。

「うむ。後でいい。」

「上着だけおぬぎなさい。ほんとに随分濡れたわね。」

「ひどく降つてるな。」

「わたし雷さまより光るのがいやなの。これじゃお湯にも行けや

しない。あなた。まだいいでしょう。わたし顔だけ洗って御化粧おしまいしてしまふから。」

女は口をゆがめて、懐紙ふところがみで生際の油をふきながら、中仕切

の外の壁に取りつけた洗面器の前に立った。リボンの簾越しに、
もろはだ両肌をぬぎ、折りがんで顔を洗う姿が見える。肌は顔よりも

ずっと色が白く、乳房の形で、まだ子供を持った事はないらしい。
 「何だか檀那になったようだな。こうしていると、たんす箆笥はあるし、
 茶棚はあるし……。」

「あけて御覧なさい。お芋か何かある筈よ。」

「よく片づいているな。感心だ。火鉢の中なんぞ。」

「毎朝、掃除だけはちゃんとしますもの。わたし、こんな処にい

るけれど、世帯持は上手なのよ。」

「長くいるのかい。」

「まだ一年と、ちよつと……。」

「この土地が初めてじゃないんだらう。芸者でもしていたのかい。」

汲くみかえる水の音に、わたくしの言うことが聞えなかったのか、又は聞えない振りをしたのか、女は何とも答えず、肌ぬぎのまま、鏡台の前に坐り毛筋棒けすきで鬢びんを上げ、肩の方から白粉をつけ初める。

「どこに出ていたんだ。こればかりは隠せるものじゃない。」

「そう……でも東京じゃないわ。」

「東京のいまわりか。」

「いいえ。ずっと遠く……。」

「じゃ、満洲……。」

「宇都の宮にいたの。着物もみんなその時分のよ。これで沢山だわねえ。」と言いながら立上つて、衣紋えもん竹だけに掛けた裾模様の単ひ衣物とえに着かえ、赤い弁慶縞の伊達締だてしめを大きく前で結ぶ様子は、少し大き過ぎる潰島田の銀糸とつりあつて、わたくしの目にはどうやら明治年間の娼妓のように見えた。女は衣紋を直しながらわたくしの側に坐り、茶ぶ台の上からバツトを取り、

「縁起だから御祝儀しゅうぎだけつけて下さいね。」と火をつけた一本を差出す。

わたくしは此の土地の遊び方をまんざら知らないのでもなかつ

たので、

「五十銭だね。おぶ代だいは。」

「ええ。それはおきまりの御規則通りだわ。」と笑いながら出した手の平を引込まさず、そのまま差伸している。

「じゃ、一時間ときめよう。」

「すみませんね。ほんとうに。」

「その代り。」と差出した手を取って引寄せ、耳元みみもとに囁くと、

「知らないわよ。」と女は目を見張って睨返にらみし、「馬鹿。」と言
いさまわたくしの肩を撲うった。

ためながしゆんすい
為永春水の小説を読んだ人は、作者が叙事のところどころ

に自家弁護の文を挾さしはさんでいることを知っているであろう。初恋の娘が恥しさを忘れて思う男に寄添うような情景を書いた時には、その後で、読者はこの娘がこの場合の様子や言葉使のみを見て、いたずらもの淫奔娘だと断定してはならない。深窓じよの女も意中を打明ける場合には芸者も及ばぬ艶なまめかしい様子になることがある。また、既に里馴れた遊女が偶然おさななじみ幼馴染の男にめぐり会うところを写した時には、商売人くろとでも斯こう云う時には娘のようにもじもじするもので、これはこの道の経験に富んだ人達の皆承知しているところで、作者の観察の至らないわけではないのだから、そのつもりでお読みなさいと云うような事が書添えられている。

わたくしは春水ならに倣ならって、ここに剩語を加える。読者は初めて

路傍で逢つた此このおんな女が、わたくしを遇する態度の馴々し過るのを怪しむかも知れない。然しこれは実地の遭遇を潤色せずに、そのまま記述したのに過ぎない。何の作意も無いのである。驟しゅうう雨雷鳴から事件の起つたのを見て、これまた作者常じょうとう套たうの筆法だと笑う人もあるだろうが、わたくしは之を慮おもんばかるがために、わざわざ事を他に設けることを欲しない。夕立が手引をした此夜の出来事が、全く伝統的に、お詠あつらい通りであつたのを、わたくしは却て面白く思い、実はそれが書いて見たいために、この一篇に筆を執り初めたわけである。

一体、この盛場の女は七八百人と数えられているそうであるが、その中に、島田や丸鬚に結っているものは、十人に一人くらい。

大体は女給まがいの日本風と、ダンスア好みの洋装とである。雨あ まやどり宿しゆくをした家の女が極く少数の旧風に属していた事も、どうやら陳腐の筆法に適當しているような心持がして、わたくしは事實の描写を傷けるきずつに忍びなかつた。

雨は歇やまない。

初め家へ上うちつた時には、少し声を高くしなければ話が聞きとれない程の降り方であつたが、今では戸口へ吹きつける風の音かみなりも雷の響も歇んで、とたんぶき亜鉛葺あしおとの屋根を撲つ雨の音と、雨だれの落ちる声ばかりになつている。路地には久しく人の声も登あしおと音も途絶えていたが、突然、

「アラアラ大変だ。きいちゃん。どじょう鱒が泳いでるよ。」という黄い

ろい声につれて下駄の音がしだした。

女はつと立ってリボンの間から土間の方を覗き、「家は大丈夫だ。溝があふれると、此方まで水が流れてくるんですよ。」

「少しは小降りになったようだな。」

「宵の口に降るとお天気になっても駄目なのよ。だから、ゆつくりしていらつしやい。わたし、今の中に御飯たべてしまうから。」

女は茶棚の中から沢庵漬たくあんづけを山盛りにした小皿と、茶漬茶碗と、それからアルミの小鍋を出して、鳥渡蓋ちよつとふたをあけて匂をかぎ、長

火鉢の上に載せるのを、何かと見れば薩摩芋さつまいもの煮たのである。

「忘れていた。いいものがある。」とわたくしは京橋で乗換の電車を待っていた時、浅草海苔のりを買ったことを思い出して、それを

出した。

「奥さんのお土産^{みやげ}。」

「おれは一人なんだよ。食べるものは自分で買わなければ。」

「アパートで彼女と御一緒。ほほほほ。」

「それなら、今時分うろついちやア居られない。雨でも雷でも、かまわず帰るさ。」

「そうねえ。」と女はいかにも^{もつとも}尤だと云うような顔をして暖くならかけたお鍋の蓋を取り、「一緒にどう。」

「もう食べて来た。」

「じゃア、あなたは向^{むこう}をむいていらつしやい。」

「御飯は自分で炊くのかい。」

「住宅すまいの方から、お昼と夜の十二時に持って来てくれるのよ。」

「お茶を入れ直そうかね。お湯がぬるい。」

「あら。はばかりさま。ねえ。あなた。話をしながら御飯をたべるのは楽しみなものね。」

「一人ツきりの、すつぽり飯はいやだな。」

「全くよ。じやア、ほんとお一人。かわいそうねえ。」

「察しておくれだろう。」

「いいの、さがして上げるわ。」

女は茶漬を二杯ばかり。何やらはしやいだ調子で、ちやらちやらと茶碗の中で箸をゆすぎ、さも急いそがしそうに皿小鉢を手早く茶棚にしまいながらも、顎おとがいを動して込上げる沢庵漬のおくびを押えつ

けている。

戸外そとには人の足音と共に「ちよいとちよいと」と呼ぶ声が聞え出した。

「歇んだようだ。また近い中に出て来よう。」

「きつと入いらっしやいね。昼間でも居ます。」

女はわたくしが上着をきかけるのを見て、後へ廻り襟えりを折返し
ながら肩越かたこしに頬ほを摺すり付けて、「きつとよ。」

「何て云う家うちだ。ここは。」

「今、名刺あげるわ。」

靴くつをはいている間あいだに、女は小窓の下に置いた物の中から三味線のバチの形に切った名刺を出してくれた。見ると寺島町七丁目六

十一番地（二部）安藤まさ方雪子。

「さよなら。」

「まっすぐにお帰んなさい。」

四

小説「失踪」の一節

吾妻橋のまん中ごろと覚しい欄干に身を倚せ、種田順平は松屋の時計を眺めては来かかる人影に気をつけている。女給のすみ子が店をしまつてからわざわざ廻り道をして来るのを待ち合しているのである。

橋の上には円タクの外電車ほかもバスももう通っていないが、二三日前から俄にわかの暑さに、シャツ一枚で涼んでいるものもあり、包をかかえて帰りをいそぐ女給らしい女の往き来もまだ途絶えずにいる。種田は今夜すみ子の泊っているアパートに行き、それからゆつくり行末の目当を定めるつもりなので、行った先で、女がどうなるものやら、そんな事は更に考えもせず、又考える余裕もない。唯今こんにち日まで二十年の間家族のために一生を犠牲にしてしまった事が、いかにもにがにがしく、腹が立ってならないのであった。

「お待ちどうさま。」思ったより早くすみ子は小走りにかけて来た。「いつでも、駒形橋こまがたばしをわたって行くんですよ。だけれど、

兼子さんと一緒だから。あの子、口がうるさいからね。」

「もう電車はなくなったようだぜ。」

「歩いたって、停留場三つぐらいだわ。その辺から円タクに乗り
ましよう。」

「明いた部屋があればいいが。」

「無かつたら今夜一晩ぐらい、わたしのとこへお泊んなさい。」

「いいのか、大丈夫か。」

「何がさ。」

「いつか新聞に出ていたじゃないか。アパートでつかまった話が
……。」

「場所によるんだわ。きつと。わたしの処なんか自由なもんよ。」

お隣も向側もみんな女給さんかお妾めかけさんよ。お隣りなんか、いろいろな人が来るらしいわ。」

橋を渡り終らぬ中に流しの円タクが秋葉神社の前まで三十銭で行く事を承知した。

「すっかり変ってしまったな。電車はどこまで行くんだ。」

「向嶋の終点。秋葉さまの前よ。バスなら真直に玉の井まで行くわ。」

「玉の井——こんな方角だったかね。」

「御存じ。」

「たつた一度見物に行った。五六年前だ。」

「賑にぎやかよ。毎晩夜店が出るし、原っぱに見世物もかかるわ。」

「そうか。」

種田は通^{とお}過^{りすぎ}る道の両側を眺めている中、自動車は早くも秋

葉神社の前に来た。すみ子は戸の引手を動しながら、

「ここでいいわ。はい。」と賃金をわたし、「そこから曲りましよう。あつちは交番があるから。」

神社の石垣について曲ると片側は花柳界の灯^{あかり}がつづいている横

町の突当り。俄に暗い空地の一隅に、吾妻アパートという灯が、

セメント造りの四角な家の前面を照している。すみ子は引戸をあ

けて内^{なか}に入り、室の番号をしるした下駄箱に草履をしまうので、

種田も同じように履物を取り上げると、

「二階へ持って行きます。目につくから。」とすみ子は自分のス

リッパーを男にはかせ、その下駄を手にさげて正面の階段を先に立って上る。

外側の壁や窓は西洋風に見えるが、内は柱の細い日本造りで、ぎしぎし音のする階段を上りきった廊下の角に炊事場があつて、シユミイズ一枚の女が、断髪を振乱したまま薬罐やかんに湯をわかしていた。

「今晚。」とすみ子は軽く挨拶をして右側のはずれから二番目の扉を鍵かぎであけた。

畳のよごれた六畳ほどの部屋で、一方は押入、一方の壁際にはたんす箆筒、他の壁には浴衣ゆかたやボイルの寝間着がぶら下げてある。すみ子は窓を明けて、「ここが涼しいわ。」と腰巻たびや足袋の下つてい

る窓の下に座布団を敷いた。

「一人でこうしていれば全く気楽だな。結婚なんか全く馬鹿らしくなるわけだな。」

「家ではしよつちゆう帰つて来いつて云うのよ。だけれど、もう駄目ねえ。」

「僕ももう少し早く覚醒かくせいすればよかつたのだ。今じやもう晚おそい。」と種田は腰巻の干してある窓越しに空の方を眺めたが、思出したように、「明間あきまがあるか、きいてくれないか。」

すみ子は茶を入れるつもりと見えて、湯わかしを持ち、廊下へ出て何やら女同士で話をしていたが、すぐ戻つて来て、

「向むこうの突当りが明いているそうです。だけれど今夜は事務所のお

ばさんが居ないんですとき。」

「じゃ、借りるわけには行かないな。今夜は。」

「一晩や二晩、ここでもいいじゃないの。あんたさえ構わなければ。」

「おれはいいが。あんたはどうする。」と種田は眼を円くした。

「わたし。此処ここに寝るわ。お隣りの君ちゃんのとこへ行つてもい

いのよ。彼氏が来ていなければ。」

「あんたの処とこは誰も来ないのか。」

「ええ。今のところ。だから構わないのよ。だけれど、先生を誘惑してもわるいでしょう。」

種田は笑いたいような、情ないような一種妙な顔をしたまま何

とも言わない。

「立派な奥さんもお嬢さんもいらつしやるんだし……。」

「いや、あんなもの。晩^{おそまき}時でもこれから新生涯に入るんだ。」

「別居なさるの。」

「うむ。別居。むしろ離別さ。」

「だって、そうはいかないでしょう。なかなか。」

「だから、考えているんだ。乱暴でも何でもかまわない。一時姿を晦^{くらま}すんだな。そうすれば決裂の糸口がつくだろうと思うんだ。」

すみ子さん。明部屋のはなしが付かなければ、迷惑をかけても済まないから、僕は今夜だけ何^{どこ}処かで泊ろう。玉の井でも見物しよう。」

「先生。わたしもお話したいことがあるのよ。どうしようかと思
つて困つてる事があるのよ。今夜は寝ないで話をして下さらない
」

「この頃はじき夜があけるからね。」

「このあいだ横浜までドライブしたら、帰り道には明るくなったわ
」。

「あなたの身上話は、初めツから聞いたら、女中で僕の家へ来る
まででも大変なものだろう。それから女給になってから、まだ先
があるんだからな。」

「一晩じゃ足りないかも知れないわね。」

「全く……ははははは。」

ひとしきりしん

「一時寂としていた二階のどこやらから、男女の話声が聞え出した。炊事場では又しても水の音がしている。すみ子は真実夜通し話をするつもりと見えて、帯だけ解いて丁寧に畳み、足袋を其上に載せて押入にしまい、それから茶ぶ台の上を拭ふきな直して茶を入れながら、

「わたしのこうなつた訳、先生は何だと思つて。」

「さア、やっぱり都会のあこがれだと思ふんだが、そうじゃないのか。」

「それも無論そうだけれど、それよりか、わたし父の商売が、とてもいやだったの。」

「何だね。」

「親分とか 俠きょうかく 客とかいいうんでしよう。とにかく暴力団……。」
とすみ子は声を低くした。

五

梅雨つゆがあけて暑中になると、近鄰の家の戸障子が一斉に明け放されるせいでもあるか、他の時節には聞えなかつた物音が俄に耳立たてつてきこえて来る。物音の中で最もわたくしを苦しめるものは、
板塀いたべい一枚を隔てた鄰家のラデオである。

夕方少し涼しくなるのを待ち、燈下の机に向おうとすると、丁度その頃から亀裂ひびの入いつたような鋭い物音が湧起わきおこつて、九時過

ぎてからでなくては駄まない。此の物音の中でも、殊はなはだに甚しくわ
 たくしを苦しめるものは九州弁の政談、浪花節なにわぶし、それから学生
 の演劇に類似した朗読に洋楽を取り交ぜたものである。ラディオ
 ばかりでは物足らないと見えて、昼夜時間をかまわず蓄音機で流は
やりうた行唄ならを鳴し立てる家もある。ラディオの物音を避けるために、
 わたくしは毎年夏になると夕飯ゆうめしもそこそこに、或時は夕飯も外
 で食うように、六時を合図にして家を出ることにしている。ラデ
 イオは家を出れば聞えないというわけではない。道端の人家や商
 店からは一段烈しい響が放たれているのであるが、電車や自動車
 の響と混こん淆こうして、市街一般の騒音となつて聞えるので、書齋に
 孤坐している時にくらべると、歩いている時の方が却て気になら

ず、余程樂である。

「失踪」の草稿は梅雨があけると共にラディオに妨げられ、中絶してからもう十日あまりになった。どうやら其そのまま感興も消え失せてしまいそうである。

今年の夏も、昨年また一昨年と同じように、毎日まだ日の没しない中うちから家を出るが、実は行くべきところ、歩むべきところが無い。神代帚葉翁こうじろそうようおうが生きていた頃には毎夜欠かさぬ銀座の夜涼みも、一夜いちやごとに興味の加くわるほどであつたのが、其人も既に世を去り、街頭の夜色にも、わたくしはもう飽果あきはてたような心持になつている。之に加えて、其後銀座通にはうっかり行かれないよぜんうな事が起つた。それは震災前新橋の芸者家に出入していたと云

う車夫が今は一見して人殺しでもしたことのありそうな、人相と風ふうてい体の悪い破落戸ならずものになつて、折節おりふし尾張町辺を徘徊はいかいし、むかし見覚えのあるお客の通るのを見ると無心難題を言いかける事である。

はじめ最初黒沢商店の角で五拾錢銀貨を恵んだのが却て悪い例となり、恵まれぬ時は悪声を放つので、人だかりのするのが厭いやさにまた五拾錢やるようになってしまふ。此男に酒手さかての無心をされるのはわたくしばかりではあるまいと思つて、或晩欺いて四辻の派出所へ連れて行くと、立番の巡查とはとうに馴染になつていて、巡查は面倒臭さに取り合つてくれる様子をも見せなかつた。出雲町いずもちよう：
：イヤ七丁目の交番でも、或日巡查と笑いながら話をしてゐるの

を見た。巡查の眼にはわたくしなどより此男の方が却て素姓が知れているのかも知れない。

わたくしは散策の方面を隅田河の東に替え、溝どぶぎわ際ぎわの家に住んでいるお雪という女をたずねて憩やすむことにした。

四五日つづけて同じ道を往復すると、麻布あぶからの遠道も初めに比べると、だんだん苦にならないようになる。京橋と雷かみなりもん門もんとの乗替も、習慣になると意識よりも身体からだの方が先に動いてくれるので、さほど煩わずらわしいとも思わないようになる。乗客の雑ざつ沓とする時間や線路が、日によつて違ふことあきらも明かになるので、之を避けさえすれば、遠道だけにゆつくり本を読みながら行くことも出来るようになる。

電車の内なかでの読書は、大正九年の頃老眼鏡を掛けるようになってから全く廃せられていたが、雷門までの遠道を往復するようになって再び之を行うことにした。然し新聞も雑誌も新刊書も、手にする習慣がないので、わたくしは初めての出掛けには、手に触れるがまま依よたがくかい田学海の墨水二十四景を携えて行つた。

長堤蜿蜒。経三圀祠稍成彎状。至長命寺。一折為桜樹最多処。寛永中徳川大猷公放鷹於此。会腹痛。飲寺井而癒。曰。是長命水也。因名其井。並及寺号。後有芭蕉居士賞雪佳句。鱸炙人口。嗚呼公絶代豪傑。其名震世。宜矣。居士不過一布衣。同伝於後。蓋人在所樹立何如耳。

先儒の文は目前の景に対して幾分の興を添えるだろうと思つた

からである。

わたくしは三日目ぐらいには散歩の途すがら食料品を買わねばならない。わたくしは其ついでに、女に贈る土産物をも買った。

此事が往訪すること僅に四五回にして、二重の効果を収めた。

いつもかんづめ罐詰ばかり買うのみならず、シャツや上着もボタンの

取れたのを着ているのを見て、女はいよいよわたくしをアパート

住いのひとりもの独者と推定したのである。独身ならば毎夜のように遊

びに行つても一向不審はないと云う事になる。ラデオのため
家に居られないと思う筈もなからうし、又芝居や活動を見ないの
で、時間を空費するところがない。行く処がないので来る人だとも
思う筈がない。この事は言訳をせずとも自然にうまく行つたが、

金の出^で処^{どころ}について疑いをかけられはせぬかと、場所柄だけに、

わたくしはそれとなく質問した。すると女は其晩払うものさえ払

つてくれれば、他^{ほか}の事はてんで考えてもいないと云う様子で、

「こんな処^{ところ}でも、遣^{つか}う人は随分遣うわよ。まる一ト月居続けた

お客があつたわ。」

「へえ。」とわたくしは驚き、「警察へ届けなくつてもいいのか。

吉原なんかだとじき届けると云う話じゃないか。」

「この土地でも、家^{うち}によつちやアするかも知れないわ。」

「居続したお客は何だった。泥棒か。」

「呉服屋さんだったわ。とうとう店の檀^{だんな}那^なが来て連れて行つたわ

。」

「勘定の持逃げだね。」

「そうでしょう。」

「おれは大丈夫だよ。其方は^{そのほう}。」と言ったが、女はどちらでも構わないという顔をして聞返しもしなかった。

然しわたくしの職業については、女の方ではとうから勝手に取りきめているらしい事がわかつて来た。

二階の襖^{ふすま}に半紙四ツ切程の大きさに複製した浮世絵の美人画が張^{はりませ}交^{まじ}にしてある。その中には歌麻呂の鮑^{あわび}取り、豊^{とよのぶ}信^{のぶ}の入浴美女^{はななど}など、曾^{かつ}てわたくしが雑誌^{このはな}此^{さしえ}花^の挿^さ絵^{しえ}で見覚えているものもあつた。北斎の三冊本、福徳和合人の中から、男の姿を取り去り、女の方ばかりを残したのもあつたので、わたくしは委^{くわ}しくこの

書の説明をした。それから又、お雪がお客と共に二階へ上つてい
る間、わたくしは下の一ト間で手帳へ何か書いていたのを、ちら
と見て、てつきり秘密の出版を業とする男だと思つたらしく、こ
ん度来る時そういう本を一冊持つて来てくれと言出した。

家には二三十年前に集めたものの残りがあつたので、請われる
まま三四冊一度に持つて行つた。ここに至つて、わたくしの職業
は言わず語らず、それと決められたのみならず、悪銭の出でどころ処も
おのずから明瞭になつたらしい。すると女の態度は一層打解けて、
全く客扱いをしないようになった。

日蔭に住む女達が世を忍ぶ後暗い男に対する時、恐れもせず嫌
いもせず、必ず親密と愛憐との心を起す事は、夥かた多の実例に徴し

て深く説明するにも及ぶまい。鴨川かもがわの芸妓は幕吏に追われる志士を救い、寒駅の酌婦は関所破りの博徒に旅費を恵むことを辞さなかつた。トスカは逃竄とうざんの貧士に食を与え、三千歳みちとせは無頼漢に恋愛の真情を捧げて悔いなかつた。

此こゝに於てわたくしの憂慮するところは、この町の附近、若しくは東武電車の中などで、文学者と新聞記者とに出会わぬようにする事だけである。この他の人達には何処たで会おうと、後をつけられようと、一向に差問さしつかえはない。謹厳な人達からは年少の頃から見限られた身である。親類の子供もわたくしの家には寄りつかないようになつてゐるから、今では結局憚はばかるものはない。ただ独恐ひとりる可べきは操觚そうこの士である。十余年前銀座の表通しきりにカフエー

が出来はじめた頃、此に酔を買った事から、新聞と云う新聞は挙こぞつてわたくしを筆ひつちゆう誅しゅうした。昭和四年の四月「文藝春秋」という雑誌は、世に「生存させて置いてはならない」人間としてわたくしを攻撃した。其文中には「処女誘拐」というが如き文字をも使用した所を見るとわたくしを陥れて犯法の罪人たらしめようとしたものかも知れない。彼等はわたくしが夜竊ひそかに墨水をわたつて東に遊ぶ事を探知したなら、更に何事を企図するか測りがたい。これ真に恐る可きである。

毎夜電車の乗降りのみならず、この里へ入込んでからも、夜店の賑にぎわう表通は言うまでもない。路地の小径こみちも人の多い時には、前後左右に気を配って歩かなければならない。この心持は「失踪しつそう」

の主人公種田順平が世をしのぶ境遇を描写するには必須ひつしゆの実験
であろう。

六

わたくしの忍んで通う溝どぶぎわ際わの家が寺島町七丁目六十何番地に
在ることは既に識しるした。この番地のあたりはこの盛場では西北の
すみ隅すみに寄つたところで、目貫めぬきの場所ではない。仮に之を北里たもとに譬たとえ
て見たら、京町一丁目も西河岸がしに近いはずれとでも言うべきもの
であろう。聞いたばかりの話だから、鳥渡ちよつとつう通めかして此盛場の
沿革を述べようか。大正七八年の頃、浅草観音堂裏手の境内せばが狭

められ、広い道路が開かれるに際して、むかしから其辺に櫛比しつひしていた楊弓場ようきゆうば銘酒屋のたぐいことごとが悉く取払いを命ぜられ、現在いまでも京成バスの往復している大正道路の両側に処定めず店を移した。つづいて伝法院の横手や江川玉乗えがわりの裏あたりからも追われて来るものが引きも切らず、大正道路は殆軒並銘酒屋になつてしまい、通行人は白昼でも袖そでを引かれ帽子を奪われるようになったので、警察署の取締りが厳しくなり、車の通る表通から路地の内へと引込ませられた。浅草の旧地では凌雲閣りょううんかくの裏手から公園の北側千束町の路地に在つたものが、手を尽して居残りの策を講じていたが、それも大正十二年の震災のために中絶し、一時悉くこの方面へ逃げて来た。市街再建の後西見番にしけんばんと称する芸者家組合をつ

くり転業したのもあつたが、この土地の繁栄はますます盛になり遂に今日の如き半ば永久的な状況を呈するに至つた。初め市中との交通は白髯橋しらひげばしの方面一筋だけであつたので、去年京成電車が運転を廃止する頃までは其停留場に近いところが一番賑にぎやかであつた。

然るに昭和五年の春都市復興祭の執行せられた頃、吾妻橋から寺島町に至る一直線の道路が開かれ、市内電車は秋葉神社前まで、市営バスの往復は更に延長して寺島町七丁目のはずれに車庫を設けるようになった。それと共に東武鉄道会社が盛場の西南に玉の井駅を設け、夜も十二時まで雷門から六銭で人を載せて来るに及び、町の形勢は裏と表と、全く一変するようになった。今まで一

番わかりにくかつた路地が、一番入り易くなつた代り、以前目貫といわれた処が、今では端はすれになつたのであるがそれでも銀行、郵便局、湯屋、寄席よせ、活動写真館、玉の井いなり稲荷の如きは、いずれも以前のまま大正道路に残つていて、俚俗りぞく広小路、又は改正道路と呼ばれる新しい道には、円タクの輻ふく湊そうと、夜店の賑いとを見るばかりで、巡査の派出所も共同便所もない。このような辺鄙へんぴな新開町に在つてすら、時勢に伴う盛衰の変は免れないのであつた。況いや人わんの一生に於いてをや。

わたくしがふと心易くなつた溝際の家……お雪という女の住む家が、この土地では大正開拓期の盛時を想おも起いさせ一隅おこに在

つたのも、わたくしの如き時運に取り残された身には、何やら深い因縁があつたように思われる。其家は大正道路から唯ある路地に入り、汚れた幟のぼりの立っている伏見稲荷の前を過ぎ、溝に沿うて、なお猶奥深く入り込んだ処に在るので、表通のラデオや蓄音機の響ひやかしも素見客の足音に消されてよくは聞えない。夏の夜、わたくしがラデオのひびきを避けるにはこれほど適した安息処は他にはあるまい。

一体この盛場では、組合の規則で女が窓に坐る午後四時から蓄音機やラデオを禁じ、また三味線をも弾ひかせないと云う事で。雨のしとしとと降る晩など、ふけるにつれて、ちよいとちよいとの声も途絶えがちになると、家の内うちそと外むらに群り鳴く蚊の声が耳立

つて、いかにも場末の裏町らしい侘^{わび}しさが感じられて来る。それも昭和現代の陋^{ろろう}巷^{こう}ではなくして、鶴屋南北の狂言などから感じられる過去の世の裏淋しい情味である。

いつも島田か丸^{まる}鬚^{まげ}にしか結っていないお雪の姿と、溝の汚さと、蚊の鳴^{なく}声^{こえ}とはわたくしの感覚を著しく刺戟^{しげき}し、三四十年むかしに消え去った過去の幻影を再現させてくれるのである。わたくしはこのはかなくも怪し気なる幻影の紹介者に対して出来得ることならあからさまに感謝の言葉述べたい。お雪さんは南北の狂言を演じる俳優よりも、蘭^{らん}蝶^{ちょう}を語る鶴賀^{つが}なにがしよりも、過去を呼返す力に於ては一層巧妙なる無言の芸術家であった。

わたくしはお雪さんが飯櫃^{おはち}を抱きかかえるようにして飯をよそ

い、さらさら音を立てて茶漬ちやづけを搔込かっこむ姿を、あまり明くない電燈の光と、絶えざる溝蚊どぶかの声の中にじつと眺めやる時、青春のころ狎なれした しんだ女達の姿やその住居すまいのさまをありありと目の前に思浮べる。わたくしのものばかりでない。友達の女の事までが思出されて来るのである。そのころには男を「彼氏」といい、女を「彼女」とよび、二人の侘住居を「愛の巢」などと云う言葉はまだ作り出されていなかった。馴染なじみの女は「君」でも、「あんた」でもなく、ただ「お前」といえばよかった。亭主は女房を「おツかア」女房は亭主を「ちゃん」と呼ぶものもあつた。

溝の蚊の唸うなる声は今こんにち日に在つても隅田川を東に渡つて行けば、どうやら三十年前のむかしと変りなく、場末の町のわびしさを歌

つていゝのに、東京の言葉はこの十年の間に変われば実にも変わったものである。

そのあたり片づけて吊る蚊帳かちようかな哉

さらぬだに暑くるしきを木綿蚊帳もめんがや

家いえ中ちゆうは秋の西日せいじつや溝どぶのふち

わび住みうちわや団扇うちわも折れて秋暑し

蚊帳の穴むすびむすびて九月哉

屑籠くつかごの中からも出て鳴く蚊かな

残る蚊をかぞへる壁や雨のしみ

この蚊帳も酒とやならむ暮の秋

これはお雪が住む家の茶の間に、或夜蚊帳が吊つてあつたのを見て、ふと思出した旧作の句である。なかば半は亡友唾々ああ君が深川長慶寺裏の長屋に親の許さぬ恋人と隠れ住んでいたのを、其折々尋ねて行つた時よんだもので、明治四十三四年のころであつたろう。

その夜お雪さんは急に齒が痛くなつて、今しがた窓際から引込んで寝たばかりのところだと言いながら蚊帳からは這い出したが、坐る場処がないので、わたくしと並んであがり上がまち框へ腰をかけた。「いつもよりおそ晚いじゃないのさ。あんまり、待たせるもんじやないよ。」

女の言葉遣いはその態度と共に、わたくしの商売が世間を憚る

ものと推定せられてから、狎昵こうじつの境さかいを越えて寧放濫むしるほうらんに走る嫌いやがあつた。

「それはすまなかつた。虫歯か。」

「急に痛くなつたの。目がまわりそうだったわ。腫はれてるだろう。」と横顔を見せ、「あなた。留守番留守番していて下さいな。わたし今の中歯うち医者へ行って来るから。」

「この近処か。」

「検査場けんさばのすぐ手前よ。」

「それじゃ公設市場の方だろう。」

「あなた。方々歩くと見えて、よく知ってるんだねえ。浮気者。」

「痛い。そう邪慳じゃけんにするもんじやない。出世前からだの身体だよ。」

「じゃ頼むわよ。あんまり待たせるようだったら帰って来るわ。」
「お前待ち待ち蚊帳の外……と云うわけか。仕様がなない。」

わたくしは女の言葉遣いがぞんざいになるに従って、それに適
応した調子を取るようになっている。これは身分を隠そうが為の手
段ではない。処と人とを問わず、わたくしは現代の人と応接する
時には、あたかも外国に行つて外国語を操あやつるように、相手と同じ
言葉を遣う事こつちにしているからである。「おらが国」と向の人が言
つたら此方こつちも「おら」を「わたくし」の代りに使う。説話はなしは少し
余事にわたるが、現代人と交際する時、口語を学ぶことは容易で
あるが文書の往復になると頗すこぶる困難を感じる。殊に女の手紙に返書
を裁する時「わたし」を「あたし」となし、「けれども」を「け

ど」となし、又何事につけても、「必然性」だの「重大性」だのと、性の字をつけて見るのも、冗談半分口先で真似をしている時とはちがって、之を筆にする段になると、実に堪難い嫌悪けんおの情を感じなければならぬ。恋しきは何事につけても還らぬむかしで、あたかもその日、わたくしは虫干をしていた物の中に、柳橋やなぎばしの妓にして、向嶋小梅の里に囲われていた女の古い手紙を見た。手紙には必ずそうろうぶん候文すずりを用いなければならなかった時代なので、その頃の女は、硯すずりを引寄せ筆を乗れば、文字を知らなくとも、おのずから候可く候の調子を思出したものらしい。わたくしは人の嗤ししょう笑を顧ず、これをここに録したい。

一筆^{ふで}申上まいらせ候。その後は御ぶさた致し候て、何とも申わけ^{これなく}無之御免下されたく候。私事これまでの住居^{すまい}誠に手ぜまに付この中右^{じゆう}のところへしき移り候まま御^{おん}知らせ申上候。まことにまことに申上かね候え共、少々お目もじの上申上たき事御ざ候間、何^{なにとぞ}卒御都合なし下されて、あなた様のよろしき折御立より下されたく幾重にも御^{おん}待申上候。一日も早く御越しのほど、先^{ます}は御めもじの上にてあらあらかしく。

○○より

竹屋の渡しの下にみやこ湯と申す湯屋あり。八百屋^{やおや}でお聞下さい。天气がよろしく候故御都合にて唾^あ々^あさんもお誘い合され堀^ほ切^{りきり}へ参りたくと存候間御^{おん}する前からいかかに候や。御たずね

申上候。もつとも尤この御返事御無用にて候。

文中「ひき移り」を「しき移り」となし、「ひる前」を「しる前」に書き誤っているのは東京下町言葉の訛りである。竹屋の渡しも今は枕まくらばし橋わたしの渡と共に廃せられて其跡そのあともない。我青春の名残なごりを弔とむらうに今は之なへんを那辺に探るべきか。

七

わたくしはお雪の出で行った後、あと半なかばおろした古蚊帳の裾すそに坐つて、一人蚊を追いながら、時には長火鉢に埋めた炭火と湯わかし

とに気をつけた。いかに暑さの烈しい晩でも、この土地では、お客の上った合図に下から茶を持って行く習慣なので、どの家でも火と湯とを絶たやした事がない。

「おい。おい。」と小声に呼んで窓を叩たたくものがある。

わたくしは大方馴染の客であろうと思ひ、出ようか出まいかと、様子うかがを窺つてゐると、外の男は窓口から手を差入れ、猿をはずして扉とをあけて内なかへ入つた。白っぽい浴衣ゆかたに兵児帯へこをしめ、田舎臭い円顔くちひげに口髯はやを生した年は五十ばかり。手には風呂敷すぐさまに包んだものを持つてゐる。わたくしは其様子と其顔立とで、直様すぐさまお雪の抱かかえぬし主しだらうと推察したので、向から言うのを待たず、

「お雪さんは何だか、お医者へ行くつて、今おもてで逢いました

」。

抱主らしい男は既にその事を知っていたらしく、「もう帰るでしょう。待っていなさい。」と云つて、わたくしの居たのを怪しむ風もなく、風呂敷包を解いて、アルミの小鍋を出し茶棚の中へ入れた。夜食の惣菜そうざいを持って来たのを見れば、抱主に相違はない。

「お雪さんは、いつも忙しくつて結構ですねえ。」

わたくしは挨拶のかわりに何かお世辞を言わなければならぬと思つて、そう言つた。

「何ですか。どうも。」と抱主の方でも返事に困ると云つたような、意味のない事を言つて、火鉢の火や湯の加減を見るばかり。

面と向つてわたくしの顔さえ見ない。寧ろ対談を避けるといふように横を向いているので、わたくしも其まま黙つていた。

こういう家の亭主と遊客との対面は、両方とも甚気はなはだまずいものである。貸座敷、待合茶屋、芸者家などの亭主と客との間もまた同じことで、此両者の対談する場合は、必ず女を中心にして甚気まずい紛擾ごたごたの起つた時で、然らざる限り対談の必要が全くないからでもある。

いつもお雪が店口で焚く蚊遣香かやりこうも、今夜は一度もともされなかつたと見え、家いえ中じゆうにわめく蚊の群は顔を刺すのみならず、口の中へも飛込もうとするのに、土地馴れている筈の主人も、暫く坐っている中我慢うちがしきれなくなつて、中仕切の敷居際に置き

た扇風機の引手を捻ねじつたが破こわれていると見えて廻らない。火鉢ひきだしの抽斗ひきだしから漸ようやく蚊遣香の破片かけらを見出した時、二人は思わず安心したように顔を見合せたので、わたくしは之を機会に、

「今年はどこもひどい蚊ですよ。暑さも格別ですがね。」と言うと、

「そうですね。ここはもともと埋地ろくで、碌ろくに地揚じあげもしないんだから。」と主人もしぶしぶ口をきき初めた。

「それでも道がよくなりましたね。第一便利になりましたね。」

「その代り、何かにつけて規則がやかましくなった。」

「そう。二三年前にや、通ると帽子なんぞ持って行ったものですね。」

「あれにや、わたし達この中の者も困ったんだよ。用があつても通れないからね。女達にそう言つても、そう一々見張りをしても居られないし、仕方がないから罰金を取るようにしたんだ。店の外へ出てお客をつかまえる処を見つかるると四十二円の罰金だ。それから公園あたりへ客引を出すのも規則違反にしたんだ。」

「それも罰金ですか。」

「うむ。」

「それは幾いくら何ですか。」

遠廻しに土地の事情を聞出そうと思つた時、「安藤さん」と男の声で、何やら紙かみきれ片を窓に差入れて行つた者がある。同時にお雪が帰つて来て、その紙を取上げ、猫板の上に置いたのを、ぬすみ偷

見^みすると、^{とうしやずり} 謄写摺にした強盜犯人搜索の回状である。

お雪はそんなものには目も触れず、「お父さん、あした抜かなくつちやいけないって云うのよ。この齒。」と言って、主人の方へ開^あいた口を向ける。

「じやア、今夜は食べる物はいらなかつたな。」と主人は立ちかけたが、わたくしはわざと見えるように金を出してお雪にわたし、一人先へ立つて二階に上つた。

二階は窓のある三畳の間に茶ぶ台を置き、次が六畳と四畳半位の二間しかない。一体この家はもと一軒であつたのを、表と裏と二軒に仕切つたらしく、下は茶の間の一室きりで台所も裏口もなく、二階は梯子^{はしご}の降口^{おりくち}からつづいて四畳半の壁も紙を張つた薄

い板一枚なので、裏どなりの物音や話声が手に取るようによく聞える。わたくしは能く耳を押つけて笑う事があつた。

「また、そんなところ。暑いのにさ。」

上つて来たお雪はすぐ窓のある三畳の方へ行つて、染模様の剥げたカーテンを片寄せ、「此方へおいでよ。いい風だ。アラまた光つてる。」

「さつきより幾らか涼しくなつたな、成程いい風だ。」

窓のすぐ下は日蔽ひおひの葭簀よしずに遮ささえぎられているが、溝の向側に並んだ家の二階と、窓口に坐っている女の顔、往つたり来たりする人影、路地一帯の光景は案外遠くの方まで見通すことができる。屋根の上の空は鉛色に重く垂下つて、星も見えず、表通のネオンサイン

に半空^{なかぞら}までも薄赤く染められているのが、蒸暑い夜を一層蒸暑くしている。お雪は座布団を取って窓の敷居に載せ、その上に腰をかけて、暫く空の方を見ていたが、「ねえ、あなた」と突然わたくしの手を握り、「わたし、借金を返しちまったら。あなた、おかみさんにしてくれない。」

「おれ見たようなもの。仕様がないうじゃないか。」

「ハスになる資格がないって云うの。」

「食べさせることができなかつたら資格がないね。」

お雪は何とも言わず、路地のはずれに聞え出したヴィヨロンの唄につれて、鼻唄をうたいかけたので、わたくしは見るともなく顔を見ようとすると、お雪はそれを避けるように急に立上り、片

手を伸して柱につかまり、乗り出すように半身を外へ突出した。

「もう十年わかれました……。」「わたくしは茶ぶ台の前に坐つて巻煙草に火をつけた。

「あなた。一体いくつなの。」「

此方^{こなた}へ振向いたお雪の顔を見上ると、いつものように片^{かた} 壓^{えくぼ}

を寄せているので、わたくしは何とも知れず安心したような心持になつて、

「もうじき六十さ。」「

「お父さん。六十なの。まだ御丈夫。」「

お雪はしげしげとわたくしの顔を見て、「あなた。まだ四十にやならないね。三十七か八かしら。」「

「おれはおめかけ妻さんに出来た子だから、ほんとの年はわからない。」

「四十にしても若いね。髪の毛なんぞそうは思えないわ。」

「明治三十一年生うまれだね。四十だと。」

「わたしはいくつ位に見えて。」

「二十一二に見えるが、四ぐらいかな。」

「あなた。口がうまいから駄目。二十六だわ。」

「雪ちゃん、お前、宇都の宮で芸者をしていたって言ったね。」

「ええ。」

「どうして、ここへ来たんだ。よくこの土地の事を知っていたね。」

「。」

「暫く東京にいたもの。」

「お金のいることがあったのか。」

「そうでもなければ……。檀那は病気で死んだし、それに少し……。」

「馴れない中は驚いたろう。芸者とはやり方がちがうから。」

「そうでもないわ。初めツから承知で来たんだもの。芸者は掛りまげがして、借金の抜ける時がないもの。それに……身を落すなら稼かせぎいい方が結句けっく徳だもの。」

「そこまで考えたのは、全くえらい。一人でそう考えたのか。」

「芸者の時分、お茶屋の姐ねえさんで知ってる人が、この土地で商売していたから、話をきいたのよ。」

「それにしても、えらいよ。年ねんがあけたら少し自前じまえで稼いで、残

せるだけ残すんだね。」

「わたしの年は水商売には向くんだとき。だけれど行先の事はわからないわ。ネエ。」

じつと顔を見詰められたので、わたくしは再び妙に不安な心持がした。まさかとは思うものの、何だか奥歯に物の挟はさまっているような心持がして、此度こんどはわたくしの方が空の方へでも顔をそむけたくなった。

表通りのネオンサインが反映する空のはずれには、先程から折々稲妻ひらめが閃いていたが、この時急に鋭い光が人の目を射た。然し雷の音らしいものは聞えず、風がぱったりや歇んで日の暮の暑さが又むし返されて来たようである。

「いまに夕立が来そうだな。」

「あなた。髪結さんの帰り……もう三月みつぎになるわネエ。」

わたくしの耳にはこの「三月になるわネエ。」と少し引延ばしたネエの聲が何やら遠いむかしを思返すとても云うように無限じょうの情を含んだように聞きなされた。「三月になります。」とか「なるわよ。」とか言切つたら平常つねの談話に聞えたのであろうが、ネエと長く引いた声は咏えいたん嘆おんの音というよりも、寧むしろそれとなくわたくしの返事を促す為に遣われたもののようにも思われたので、わたくしは「そう……。」と答えかけた言葉さえ飲み込んでしまつて、唯目まなざし容で応答をした。

お雪は毎夜路地へ入込む数知れぬ男に応接する身でありながら、

どういう訳で初めてわたくしと逢つた日の事を忘れずにいるのか、それがわたくしには有り得べからざる事のように考えられた。初ての日を思返すのは、その時の事を心に嬉しく思うが為と見なければならぬ。然しわたくしはこの土地の女がわたくしのような老としより人に対して、尤も先方ではわたくしの年を四十歳位に見ているが、それにしても好いたの惚ほれたのというような若もしくはそれに似た柔あたたかく温な感情を起し得るものとは、夢にも思つて居なかつた。

わたくしが殆ど毎夜のように足繁く通つて来るのは、既に幾度か記述したように、種いろいろ々な理由があつたからである。創作「失踪」の实地観察。ラデイオからの逃走。銀座丸ノ内のような首都枢要の市街に対する嫌悪。其他の理由もあるが、いずれも女に向

つて語り得べき事ではない。わたくしはお雪の家を夜の散歩の休憩所にしていたに過ぎないのであるが、そうする為には方便として口から出まかせの虚言うそもついた。故意に欺くつもりではないが、最初女の誤り認めた事を訂正もせず、寧ろ興にまかせてその誤認を猶深なほくするような挙動や話をして、身分を晦くらました。この責だけは免れないかも知れない。

わたくしはこの東京のみならず、西洋に在つても、売笑の巷ちまたの外、殆ほとんどその他の社会を知らないと言つてもよい。其由来はここに述べたくもなく、又述べる必要もあるまい。若しわたくしなる一人物の何者たるかを知りたいと云うような酔興しよきな人があつたなら、わたくしが中年のころにつくつた対話「昼すぎ」漫筆「妾しやうたく宅」

小説「見果てぬ夢」の如き悪文を一読せられたなら思い半なに過るものがあろう。とは言うものの、それも文章が拙つたなく、くどくどしくて、全篇をよむには面倒であろうから、ここに「見果てぬ夢」の一節を抜摘しよう。「彼が十年一日の如く花柳界に出入する元氣のあつたのは、つまり花柳界が不正暗黒の巷である事を熟知していたからで。されば若し世間が放蕩者ほうとうしゃを以て忠臣孝子の如く称賛するものであつたなら、彼は邸宅を人手に渡してまでも、其称賛の声を聞こうとはしなかつたであろう。正当な妻女の偽善的虚栄心、公明なる社会の詐欺的活動に対する義憤は、彼をして最初から不正暗黒として知られた他の一方に馳はせ赴おもむかしめた唯一の力であつた。つまり彼は真白だと称する壁の上に汚さまい種さま々な汚点しみ

を見出すよりも、投捨てられた檻樓らんるの片きれにも美しい縫取りの残り
 を発見して喜ぶのだ。正義の宮殿にも往々にして鳥や鼠の糞ふんが落
 ちていると同じく、悪徳の谷底には美しい人情の花と香かんばしい涙の
 果実が却かえつて沢山に摘み集められる。――

これを読む人は、わたくしが溝の臭気と、蚊の声との中に生活
 する女達を深く恐れもせず、醜いともせず、むしろ見ぬ前から親
 しみを覚えていた事だけは推察せられるであろう。

わたくしは彼かのおんなたち女達と懇意になるには――少くとも彼女達か
 ら敬して遠ざけられないためには、現在の身分はかくしている方
 がよいと思つた。彼女達から、こんな処ところへ来ずともよい身分の人
 だのに、と思われるのは、わたくしに取つてはいかにも辛い。彼

女達の薄倖はつこうな生活を芝居でも見るように、上から見下みおろしてよろこぶのだと誤解せられるような事は、出来得るかぎり之を避けた
いと思つた。それには身分を秘するより外はない。

こんな処へ来る人ではないと言われた事については既に实例がある。或夜、改正道路のはずれ、市営バス車庫ほとりの辺で、わたくしは
巡査に呼止められて尋問せられたことがある。わたくしは文学者だの著述業だのと自分から名乗りを揚げるのも厭いやであるし、人
からそう思われるのは猶更嫌いであるから、巡査の問に対しては例の如く無職の遊民と答えた。巡査はわたくしの上着はぎを剥取つて
所持品を改める段になると、平素ふだん夜行の際、不審尋問に遇う時の
用心に、印鑑と印鑑証明書と戸籍抄本とが囊のうちゆう中に入れてある。

それから紙入には翌日の朝大工と植木屋と古本屋とに払いがあつたので、三四百円の現金が入れてあつた。巡査は驚いたらしく、俄にわかにわたくしの事を資産家とよび、「こんな処は君見たような資産家の来るところじゃない。早く帰りたまえ、間違ひがあるといかんから、来るなら出直して来たまえ。」と云つて、わたくしが猶愚図々々しているのを見て、手を挙げて円タクを呼止め、わざわざ戸を明けてくれた。

わたくしは已やむことを得ず自動車に乗り改正道路から環状線とかいう道を廻つた。つまり迷ラビラント宮の外廓を一周して、伏見稻荷の路地口に近いところで降りた事があつた。それ以来、わたくしは地図を買つて道を調べ、深夜は交番の前を通らないようにした。

わたくしは今、お雪さんが初めて逢った日の事を咏嘆的な調子で言出したのに対して、答うべき言葉を見付けかね、煙草の烟けむりの中にせめて顔だけでもかくしたい気がしてまたもや巻煙草を取出した。お雪は黒目がちの目でじつと此方こなたを見詰めながら、

「あなた。ほんとに能く肖にているわ。あの晩、あたし後姿を見た時、はつと思つたくらい……。」

「そうか。他人のそら肖つて、よくある奴さ。」わたくしはまあ好かつたと云う心持を一生懸命に押隠した。そして、「誰に。死んだ檀那に似ているのか。」

「いいえ。芸者になつたばかりの時分……。一緒になれなかつたら死のうと思つたの。」

「逆^{のほ}上せきると、誰しも一時はそんな気を起す……。」「

「あなたも。あなたなんぞ、そんな気にやアならないでしょう。」「

「冷静かね。然し人は見掛によらないもんだからね。そう見くびつたもんでもないよ。」「

お雪は片^{かたえくほ} 齧^{かたえくほ} を寄せて笑顔をつくったばかりで、何とも言わ

なかつた。少し下唇の出た口尻の右側に、おのずと深く穿^{うが}たれる

片えくぼは、いつもお雪の顔立を娘のようにあどけなくするのであるが、其夜にかぎって、いかにも無理に寄せた齧のように、言い知れず淋しく見えた。わたくしは其場をまぎらす為に、

「また歯がいたくなつたのか。」「

「いいえ。さつき注射したから、もう何ともない。」「

それなり、また話が途絶えた時、幸にも馴染なじみの客らしいものが店口の戸を叩いてくれた。お雪はつと立って窓の外に半身を出し、目かくしの板越しに下を覗のぞき、

「アラ竹さん。お上んなさい。」

馳かけ降りる後あとからわたくしも続いて下り、暫く便所の中に姿をかくし客の上つてしまふのを待つて、音のしないように外へ出た。

八

来そうに思われた夕立も来る様子はなく、火種を絶さぬ茶の間の蒸暑さと蚊の群とを恐れて、わたくしは一時外へ出たのである

が、帰るにはまだ少し早いらしいので、溝づたいに路地を抜け、
 ここにも板橋のかかっている表の横町に出た。両側に縁日あきゆう商
 人どが店を並べているので、もともと自動車の通らない道幅は猶
 更狭くなって、出さかる人は押合いながら歩いている。板橋の右
 手はすぐ角に馬肉屋のある四よつじ辻で。辻の向側には曹洞宗東清寺
 と刻しるした石碑と、玉の井稲荷の鳥居と公衆電話とが立っている。
 わたくしはお雪の話からこの稲荷の縁日は月の二日と二十日の両
 日である事や、縁日の晩は外ばかり賑にぎやかで、路地の中は却て客足が
 少いところから、窓の女達は貧乏稲荷と呼んでいる事などを思出
 し、人込みに交って、まだ一度も参さんけい詣いしたことのやしろない祠の方へ
 行って見た。

今まで書くことを忘れていたが、わたくしは毎夜この盛場へ出
 掛けるように、心持にも身体にも共々に習慣がつくようになって
 から、この辺あたりの夜店を見歩いている人達の風俗に倣ならつて、出かけ
 には服装みなりを變かえることにしていたのである。これは別に手数のかか
 る事ではない。襟えりの返る縞のホワイトシャツの襟元のぼたんをは
 ずして襟飾をつけない事、洋服の上着は手に提げて着ない事、帽
 子がかぶらぬ事、髪の毛くしは櫛くしを入れた事もないように搔かき乱みだして
 置く事、ズボンは成るべく膝や尻すの摺り切れたくらいな古いもの
 に穿はき替かえる事。靴は穿かず、古下駄かかとも踵かかとの方が台まで摺りへつて
 いるのを搜して穿く事、煙草かならずは必バツトに限る事、エトセトラエ
 トセトラである。だから訳はない。つまり書齋に居る時、また来

客を迎える時の衣服をぬいで、庭掃除や煤すすはらい 払らいの時のものに着替え、下女の古下駄を貰つてはけばよいのだ。

古ズボンに古下駄をはき、それに古手拭をさがし出して鉢巻の巻方も至極不意気ぶいきにすれば、南は砂町、北は千住から葛西金町あた辺りまで行こうとも、道行く人から振返つて顔を見られる氣遣

いはない。其町に住んでいるものが買物にでも出たように見えるので、安心して路地へでも横町へでも勝手に入り込むことができ。この不様な身ぶざまなりは、「じだらくに居れば涼しき二階かな。」で、東京の氣候の殊に暑さの甚しい季節には最適もつとも合している。朦朧もうろう円タクの運転手と同じようなこの風をしていれば、道の上と云わず電車の中といわず何処どこでも好きな処へ啖たん唾つばも吐けるし、

煙草の吸殻、マツチの燃残り、紙屑、バナナの皮も捨てられる。公園と見ればベンチや芝生へ大の字なりに寝転んでいびき 汗をかこうが浪花節を唸ろうがうな 是また勝手次第なので、た 啻に気候のみならず、東京中の建築物とも調和して、いかにも復興都市の住民らしい心持になることが出来る。

女子がアツパツパと称する下着一枚で戸外に出歩く奇風については、友人佐藤ようさい 慵齋君の文集に載っている其論そのに譲つて、ここには言うまい。

わたくしは素足に穿き馴れぬ古下駄を突掛つつかけているので、物に躓つまずいたり、人に足を踏まれたりして、怪我をしないように気をつけながら、人ごみの中を歩いて向側の路地の突当りにある稲荷に

参詣さんけいした。ここにも夜店がつづき、祠ほこらの横手の稍やや広い空地は、植木屋が一面に並べた薔薇ばらや百合ゆり夏菊などの鉢物に時ならぬ花壇をつくつている。東清寺本堂建こんりゆう立の資金寄附者の姓名が空地の一隅に板塀の如くかけ並べてあるのを見ると、この寺は焼けたのでなければ、玉の井稻荷と同じく他所よそから移されたものかも知れない。

わたくしは常夏とこなつの花一鉢あがなを購あがない、別の路地を抜けて、もと来た大正道路へ出た。すこし行くと右側に交番がある。今夜はこの辺あたりの人達と同じような服装みなりをして、植木鉢をも手にしているから大丈夫とは思つたが、避けるに若くしはないと、後戻りして、角に酒屋と水菓子屋のある道に曲つた。

この道の片側に並んだ商店の後うしろ一帯の路地は所謂いわゆる第一部と名付けられたラビラントで。お雪の家の在る第二部を貫くかの溝は、突然第一部のはずれの道端に現われて、中島湯という暖簾のれんを下げた洗湯せんとうの前を流れ、許可地外そとの真暗な裏長屋の間に行先を没している。わたくしはむかし北廓を取巻いていた鉄漿溝おはぐろどぶより一層不潔に見える此溝も、寺島町がまだ田園であつた頃には、水草みずくさの花に蜻蛉とんぼのとまっていたような清い小流こながれであつたのであらうと、老人としよりにも似合わない感傷的な心持にならざるを得なかつた。縁日の露店はこの通には出ていない。九州亭というネオンサインを高く輝かがやかしている支那飯屋の前まで来ると、改正道路を走る自動車ひの灯が見え蓄音機の音が聞える。

植木鉢がなかなか重いので、改正道路の方へは行かず、九州亭の四ツ角から右手に曲ると、この通は右側にはラビラントの一部と二部、左側には三部の一区劃が伏在している最も繁華な最も狭い道で、呉服屋もあり、婦人用の洋服屋もあり、洋食屋もある。

ポストも立っている。お雪が髪結の帰り夕立に遇つて、わたくしの傘の下に駈込んだのは、たしかこのポストの前あたりであつた。

わたくしの胸むなそこ底には先刻お雪が半冗談なかばらしく感情の一端をほのめかした時、わたくしの覚えた不安がまだ消え去らずにいるらしい……わたくしはお雪の履歴については殆ど知るところがない。どこやらで芸者をしていたと言っているが、長唄も清元も知らないらしいので、それも確かだとは思えない。最初の印象で、わた

くしは何の抛よるところもなく、吉原か洲崎あたりの左程わるくない家にいた女らしい気がしたのが、却て当っているのではなからうか。

言葉には少しも地方の訛なまりがなが、其顔立と全身の皮膚の綺麗なことは、東京もしくは東京近在の女でない事を証明しているので、わたくしは遠い地方から東京に移住した人達の中に生れた娘と見ている。性質は快活で、現在の境涯をも深く悲しんではない。寧むしろこの境遇から得た経験を資本もとでにして、どうにか身の振方をつけようと考えているだけの元氣もあれば才智もあるらしい。男に対する感情も、わたくしの口から出まかせに言う事すら、其まま疑わずに聴き取るところを見ても、まだ全く荒すさみきつてしま

わなない事は確かである。わたくしをして、然^そう思わせるだけでも、銀座や上野^{あたり}辺の広いカフェーに長年働いている女給などに比較したなら、お雪の如きは正直とも醇^{じゆんぼく} 朴^{ぼく}とも言える。まだまだ真面目な処^{はしな}があるとも言えるであろう。

端^{はしな}無くも銀座あたりの女給と窓の女とを比較して、わたくしは後者の猶^{なほ}愛すべく、そして猶共に人情を語る事ができるもののように感じたが、街路の光景についても、わたくしはまた両方を見くらべて、後者の方が浅薄に外観の美を誇らず、見掛^{みかけ}倒しでない事から不快の念を覚えさせる事が遙^{はるか}に少ない。路^{みち}傍^{ばた}には同じように屋台店が並んでいるが、ここでは酔漢の三々五々隊をなして歩むこともなく、彼^{かしこ}処^こでは珍^{めづ}しからぬ血まみれ喧嘩^{げんか}もここでは殆

ど見られない。洋服の身なりだけは相応にして居ながら其職業の推察しかねる人相の悪い中年者が、世を憚はばからず肩で風を切り、杖を振り、歌をうたい、通行の女子を罵ののしりつつ歩くのは、銀座の外ほか他の町には見られぬ光景であろう。然るに一たび古下駄に古ズボンをはいて此の場末に來れば、いかなる雜沓ざつとうの夜よでも、銀座の裏通りに行くよりも危険のおそれがなく、あちこちと道を譲わづらわる煩しきもまた少いのである。

ポストの立っている賑な小道も呉服屋のあるあたりを明い絶頂にして、それから先は次第にさむしく、米屋、八百屋、蒲鉾屋かまぼこなどが目に立って、遂に材木屋の材木が立掛けてあるあたりまで來ると、幾度いくたびとなく來馴れたわたくしの歩みは、意識を待たず、

すぐさま自転車預り所^{どころ}と金物屋との間の路地口に向けられるのである。

この路地の中にはすぐ伏見稻荷の汚れた幟^{のぼり}が見えるが、素見^{すけん}ぞめきの客は気がつかないらしく、人の出入は他の路地口に比べると至って少ない。これを幸に、わたくしはいつも此路地口から忍び入り、表通の家の裏手に無花果^{いちじく}の茂っているのと、溝際^{どくぎわ}の柵^{さく}に葡萄^{ぶどう}のからんでいるのを、あたりに似合わぬ風景と見返りながら、お雪の家の窓口を覗く事^{こと}にしているのである。

二階にはまだ客があると見えて、カーテンに灯影^{ほかげ}が映り、下の窓はあげたままであった。表のラテイオも今しがた歇^やんだようなので、わたくしは縁日の植木鉢をそつと窓から中に入れて、其夜

はそのまま白髯橋しらひげばしの方へ歩みを運んだ。後うしろの方から浅草行の京成バスが走つて来たが、わたくしは停留場のある処をよく知らないので、それを求めながら歩きつづけると、幾程もなく行先に橋の燈火のきらめくのを見た。

*

*

*

わたくしはこの夏のはじめに稿を起した小説「失踪」の一篇をこんにち今日に至るまでまだ書き上げずにいるのである。今夜お雪がみつき「三月になるわねえ。」と言つたことから思合せると、起稿の日はそのよりも猶以前であつた。草稿の末節は種田順平が貸間の暑

さに或夜同宿の女給すみ子を連れ、白髯橋の上で涼みながら、行末の事を語り合うところで終っているので、わたくしは堤を曲らず、まっすぐに橋をわたって欄干に身を倚せて見た。

最初「失踪」の布局を定める時、わたくしはその年二十四になる女給すみ子と、其年五十一になる種田の二人が手軽く情交を結ぶことにしたのであるが、筆を進めるにつれて、何やら不自然であるような気がし出したため、折からの炎暑と共に、それなり中休みをしていたのである。

然るに今、わたくしは橋の欄干に凭れ、下流の公園から音頭踊の音楽と歌声との響いて来るのを聞きながら、先程お雪が二階の窓にもたれて「三月になるわネエ。」といった時の語調や

様子を思返すと、すみ子と種田との情交は決して不自然ではない。作者が都合の好いように作り出した脚色として折けるしりぞるにも及ばない。最初の立案を途中で変える方が却てよからぬ結果を齎もたらすかも知れないと云う心持にもなつて来る。

雷門から円タクを傭やとつて家に帰ると、いつものように顔を洗ひ髪を搔直した後、すぐさま硯すずりの傍そばの香炉こうろに香を焚いた。そして中絶した草稿の末節をよみ返して見る。

「あすこに見えるのは、あれは何だ。工場こうばか。」

「瓦斯ガス会社なんか何かだわ。あの辺はむかし景色のいいところだったんですってね。小説でよんだわ。」

「歩いて見ようか。まだそんなに晩おそかアない。」

「向へわたると、すぐ交番があつてよ。」

「そうか。それじゃ後あとへ戻ろう。まるで、悪い事をして世を忍んでいるようだ。」

「あなた。大きな声……およしなさい。」

「……………」

「どんな人が聞いていないとも限らないし……………」

「そうだね。然し世を忍んで暮すのは、初めて経験したんだが、何ともいえない、何となく忘れられない心持がするもんだね。」

「浮世離れてツて云う歌があるじゃないの。……奥山おくやまずまい。」

「すみちゃん。おれは昨夜ゆうべから急に何だか若くなつたような気が

しているんだ。昨夜だけでも活いきがいがあつたような気がしているんだ。」

「人間は気の持ちようだわ。悲観しちまつちや駄目よ。」

「全くだね。然し僕は、何にしてももう若くないからな。じきに捨てられるだろう。」

「また。そんな事、考える必要なんかないっていうのに。わたしだって、もうすぐ三十じゃないのさ。それにもう、為したい事はしちまつたし、これからはすこし真面目になつて稼かせいで見たいわ。」

「じゃ、ほんとおでん屋をやるつもりか。」

「あしたの朝、照ちゃんが来るから手金だけ渡すつもりなの。だから、あなたのお金は当分遣わずに置いて下さい。ね。昨夜も御

話したように、それがいいの。」

「然し、それじゃア……。」

「いいえ。それがいいのよ。あんたの方に貯金があれば、後が安心だから、わたしの方は持つてるだけのお金をみんな出して、一時払いにして、権利も何も彼も買ってしまおうと思ってるのよ。どの道やるなら其方が徳だから。」

「照ちやんて云うのは確な人かい。とにかくお金の話だからね。」

「それは大丈夫。あの子はお金持だもの。何しろ玉の井御殿の檀ん那なつて云うのがパトロンだから。」

「それは一体何だ。」

「玉の井で幾軒も店や家を持つてる人よ。もう七十位だわ。精力

家よ。それア。時々カフェーへ来るお客だったの。」

「ふーむ。」

「わたしにもおでん屋よりか、やるなら一層いつそうの事、あの方の店をやれって云うのよ。店も玉も照ちやんが檀那にそう言つて、いのを紹介するって云うのよ。だけれど、其時にはわたし一人きりで、相談する人もないし、わたしが自分でやるわけにも行かないしするから、それでおでん屋かスタンドのような、一人でやるものの方がいいと思つたのよ。」

「そうか、それである土地をえらんだんだね。」

「照ちやんは母さんにお金貸をさせているわ。」

「事業家だな。」

「ちやつかりしてるけれども、人をだましたりなんかしないから」

.....

九

九月も半なかちかくなつたが残暑はすこしも退しりぞかぬばかりか、八月中よりも却て烈しくなつたように思われた。簾すだれを撲うつ風ばかり時にはいかにも秋らしい響を立てながら、それも毎日のように夕方になるとぱったり風ないでしまつて、夜よはさながら関西の町に在る

が如く、深^ふけるにつれてますます蒸暑くなるような日が幾日もつづく。

草稿をつくるのと、蔵書を曝^{さら}すのことで、案外いそがしく、わたくしは三日ばかり外へ出なかつた。

残暑の日盛り蔵書を曝すのと、風のない初^{はつ}冬^{ふゆ}の午^{ひる}後^{すぎ}庭の落葉を焚^たく事とは、わたくしが独居の生涯の最も娯^{たの}しみとしている処である。曝^{ばく}書^{しよ}は久しく高閣に束ねた書物を眺めやって、初め熟読した時分の事を回想し時勢と趣味との変遷を思い知る機会をつくるからである。落葉を焚く楽しみは其身の市井^{しせい}に在ることをしばしなりとも忘れさせるが故である。

古本の虫干だけはやつと済んだので、其日夕^{ゆうめし}飯を終るが否や

いつものように破れたズボンに古下駄をはいて外へ出ると、門の柱にはもう灯ひがついていた。夕風ゆうなぎの暑さに係かからず、日はいつか驚くばかり短くなっているのである。

わずか三日ばかりであるが、外へ出て見ると、わけもなく久しい間、行かねばならない処へ行かずにいたような心持がしてわたくしは幾分なりと途中の時間まで短くしようと、京橋の電車の乗換場から地下鉄道に乗った。若い時から遊び馴れた身でありながら、女を尋ねるのに、こんな気ぜわしい心持になったのは三十年来絶えて久しく覚えた事がないと言つても、それは決して誇張ではない。雷門からはまた円タクを走らせ、やがていつもの路地口。いつもの伏見稻荷。ふと見れば汚れきった奉納のぼりの幟が四五本とも

皆新しくなつて、赤いのはなくなり、白いものばかりになつていた。いつもの溝際に、いつもの無花果と、いつもの葡萄、然しその葉の茂りはすこし薄くなつて、いくら暑くとも、いくら世間から見捨てられた此路地にも、秋は知らず知らず夜毎に深くなつて行く事を知らせていた。

いつもの窓に見えるお雪の顔も、今夜はいつもの潰島田つぶしまではなく、いちよう銀杏ぎんぎょう返しに手柄をかけたような、ぼたん牡丹とかよまげ鬘まげにこなた変つていたので、わたくしは此方から眺めて顔ちがいのしたのを怪しみながら歩み寄ると、お雪はいかにもじれつたそうに扉をあけながら、「あなた。」と一言強く呼んだ後、急に調子を低くして、

「心配したのよ。それでも、まア、よかつたねえ。」

わたくしは初め其意を解しかねて、下駄もぬがず あがりぐち 上 口へ腰
 をかけた。

「新聞に出ていたよ。少し違うようだから、そうじやあるまいと
 思っただけけれど、随分心配したわ。」

「そうか。」やつと当あてがついたので、わたくしも俄に声をひそめ、
 「おれはそんなドジなまねはしない。始終気をつけているもの。」
 「一体、どうしたの。顔を見れば別に何でもないんだけど、来
 る人が来ないと、何だか妙にさびしいものよ。」

「でも、雪ちゃん相変らずいそがしいんだらう。」

「暑い中うちは知れたものよ。いくらいそがしいたって。」

「今年はいつまでも、ほんとに暑いな。」と云った時お雪は「鳥ち

よいと
渡しずかに。」と云いながらわたくしの額にとまった蚊を掌てのひらで
おさえた。

家の内の蚊は前よりも一層多くなつたようで、人を刺す其針も
鋭く太くなつたらしい。お雪は懐ふところ紙がみでわたくしの額と自分の
手についた血をふき、「こら。こんな。」と云つて其紙を見せて
円める。

「この蚊がなくなれば年の暮だろう。」

「そう。去年お酉とり様の時分にはまだ居たかも知れない。」

「やつぱり反歩たんぽか。」ときいたが、時代の違つている事に気がつ
いて、「この辺でも吉原の裏へ行くのか。」

「ええ。」と云いながらお雪はチリンチリンと鳴る鈴の音ねを聞き

つけ、立つて窓口へ出た。

「兼ちゃん。ここだよ。何ボヤボヤしているのさ。氷白玉しらたま二つ

……それから、ついでに蚊遣香を買って来ておくれ。いい兎だ。」

そのまま窓に坐つて、通り過る素見客ひやかしにからかわれたり、又此

方つちからもからかったりしている。其間々には中仕切の大阪格子を

隔てて、わたくしの方へも話をしかける。氷屋の男がお待遠うと

云つて逃あつちえたものを持って来た。

「あなた。白玉なら食べるんでしょう。今日はわたしがおごるわ

。」

「よく覚えているなア。そんな事……。」

「覚えてるわよ。実じつがあるでしょう。だからもう、そこから中浮気

するの、お止よしなさい。」

「此ここ処へ来ないと、どこか、他わきの家うちへ行くと思つてるのか。仕様が
がない。」

「男は大概そうだもの。」

「白玉が咽喉のどへつかえるよ。食べる中うちだけ仲好くしようや。」

「知らない。」とお雪はわざと荒々しく匙さじの音をさせて山盛にした氷を突つき崩くずした。

窓口を覗のぞいた素見客が、「よう、姉さん、御馳走さま。」

「一つあげよう。口をおあき。」

「青酸加里か。命が惜しいや。」

「文無しのかせに、聞いてあきれらア。」

「何云てやんでい。溝ツ蚊女郎。」と捨台詞すてぜりふで行き過るのを此方も負けて居ず、

「へッ。芥溜野郎。」ごみため

「はははは。」と後あとから来る素見客がまた笑つて通り過ぎた。

お雪は氷を一匙口へ入れては外を見ながら、無意識に、「ちよつと、ちよつと、だーんな。」と節をつけて呼んでいる中、立止つて窓を覗くものがあると、甘えたような声をして、「お一人、じゃ上つてよ。まだ口あけなんだから。さア、よう。」と言つて見たり、また人によつては、いかにも殊勝らしく、「ええ。構いません。お上りになつてから、お気に召さなかつたら、お帰りになつても構いませんよ。」と暫くの間話をして、その挙句あげくこれも

上らざに行つてしまつても、お雪は別につまらないという風さえもせず、思出したように、解けた氷の中から残つた白玉をすくい出して、むしやむしや食べたり、煙草をのんだりしている。

わたくしは既にお雪の性質を記述した時、快活な女であるとも言ひ、また其境涯をさほど悲しんでもいはないと言つた。それは、わたくしが茶の間の片隅に坐つて、破やれうちわ団扇の音も成るべくしないように蚊を追ひながら、お雪が店先に坐つている時の、こういう様子を納簾のれんの間から透すかし見て、それから推察したものに外ならない。この推察は極く皮相とどまに止つてゐるかも知れない。為ひととなり人なりの一面を見たに過ぎぬかも知れない。

然しここにわたくしの觀察の決して誤らざる事を断言し得る事

がある。それはお雪の性質の如何いかにに係らず、窓の外の人通りと、窓の内のお雪との間には、互に融和すべき一縷るの糸の繋つながれてい
ることである。お雪が快活の女で、其境涯を左程悲しんでいない
ように見えたのが、若もしわたくしの誤りであつたなら、其誤はこ
の融和から生じたものだ、わたくしは弁解したい。窓の外は大
衆である。即すなわち世間である。窓の内は一個人である。そしてこの
両者の間には著しく相反目している何物もない。これは何なんに因る
のであろう。お雪はまだ年が若い。まだ世間一般の感情を失わな
いからである。お雪は窓に坐っている間はその身を卑しいものと
なして、別に隠している人格を胸の底に持つている。窓の外を通
る人は其歩みを此路地に入るや仮面をぬぎ矜きようふ負ふを去るからで

ある。

わたくしは若い時から脂粉の巷ちまたに入り込み、今にその非を悟らない。或時は事情に捉とらわれて、彼女達かのおんなたちの望むがまま家に納いれて箕帚きそうを把とらせたこともあつたが、然しそれは皆失敗に終つた。彼女達は一たび其境遇を替え、其身を卑しいものではないと思うようになれば、一変して教う可からざる懶婦らんぷとなるか、然らざれば制御しがたい悍婦かんぷになつてしまふからであつた。

お雪はいつとはなく、わたくしの力に依つて、境遇を一変させようと云う心を起している。懶婦か悍婦かにならうとしてゐる。お雪の後半生をして懶婦たらしめず、悍婦たらしめず、真に幸福なる家庭の人たらしめるものは、失敗の経験にのみ富んでいるわ

たくしではなくして、前途に猶多くの歲月を持つている人でなければならぬ。然し今、これを説いてもお雪には決して分ろう筈がない。お雪はわたくしの二重人格の一面だけしか見ていない。わたくしはお雪の窺うかがい知らぬ他の一面を曝露して、其非を知らしめるのは容易である。それを承知しながら、わたくしが猶ちゆうち躊躇よしているのは心に忍びないところがあつたからだ。これはわたくしを庇かばうのではない。お雪が自らその誤解を覚さとつた時、甚しく失望し、甚しく悲しみはしまいかと云うことをわたくしは恐れ居たからである。

お雪は倦うみつかれたわたくしの心に、偶然過去の世のなつかしい幻影を彷彿ほうふつたらしめたミューズである。久しく机の上に置い

てあつた一篇の草稿は若しお雪の心がわたくしの方に向けられなかつたなら、——少くとも然^そう云う気がしなかつたなら、既に裂き棄てられていたに違いない。お雪は今の世から見捨てられた一老作家の、他分そが最終の作とも思われる草稿を完成させた不可思議な激励者である。わたくしは其顔を見るたび心から礼を言いたいと思つている。其結果から論じたら、わたくしは処世の経験に乏しい彼の女を欺^{おん}き、其身体^{しんたい}のみならず其の真情をも弄^{もてあそ}んだ事になるであろう。わたくしは此の許され難い罪の詫^わびをしたいと心ではそう思いながら、そうする事の出来ない事情を悲しんでゐる。

その夜、お雪が窓口で言つた言葉から、わたくしの切ない心持

はいよいよ切なくなつた。今はこれを避けるためには、重ねてその顔を見ないに越したことはない。まだ、今の中ならば、それほど深い悲しみと失望とをお雪の胸に与えずとも済むであろう。お雪はまだ其本名をも其生立おいたちをも、問われないままに、打明うちあける機会に遇わなかつた。今夜あたりがそれとなく別れを告げる瀬戸際で、もし之を越したなら、取返しをつかない悲しみを見なければなるまいと云うような心持が、夜のふけかけるにつれて、わけもなく激しくなつて来る。

物に追われるような此心持は、折から急に吹出した風が表通から路地に流れ込み、あち等こち等へ突当つた末、小さな窓から家の内なかまで入つて来て、鈴のついた納簾のれんの紐ひもをゆるする。其音につれ

て一しお深くなつたように思われた。其音は風鈴売がれんじまど櫺子窓の外を通る時ともちがつて、此別天地より外には決して聞かれないものである。夏の末から秋になつても、打続く毎夜のあつさに今まで全く気のつかかなかつただけ、その響は秋の夜もいよいよまふつたくの夜長らしく深ふけそめて来た事を、しみじみと思ひ知らせるのである。気のせいか通る人のあしおと蹠音も静にさ冴え、そこ等の窓でくしやみをする女の声も聞える。

お雪は窓から立ち、茶の間へ来て煙草へ火をつけながら、思出したように、

「あなた。あした早く来てくれない。」と云つた。

「早くつて、夕方か。」

「もつと早くさ。あしたは火曜日だから診察日なんだよ。十一時にしまうから、一緒に浅草へ行かない。四時頃までに帰って来ればいいんだから。」

わたくしは行ってもいいと思つた。それとなく別べつばい盃くを酌くむために行きたい気はしたが、新聞記者と文学者に見られて又もや筆ひつちゆう 誅せせられる事を恐れもするので、

「公園は具合のわるいことがあるんだよ。何か買うものでもあるのか。」

「時計も買いたいし、もうすぐあわせ裕せだから。」

「あついあついと言つてる中、ほんとにもうじきお彼岸だね。裕はどのくらいするんだ。店で着るのか。」

「そう。どうしても三十円はかかるでしょう。」

「そのくらいなら、ここに持っているよ。一人で行って誂あつらえておいでな。」と紙入を出した。

「あなた。ほんと。」

「気味がわるいのか。心配するなよ。」

わたくしは、お雪が意外のよろこびに眼を見張った其顔を、永く忘れないようにじっと見詰めながら、紙入の中の紙幣さつを出して茶ぶ台の上に置いた。

戸を叩たたく音と共に主人の声がしたので、お雪は何か言いかけたのも、それなり黙だてつて、伊達締だてしめの間に紙幣さつを隠す。わたくしは突つと立たつて主人あるじと入れちがいに外へ出た。

伏見稻荷の前まで来ると、風は路地の奥とはちがつて、表通か
 ら真まつこう向に突き入りいきなりわたくしの髪を吹乱した。わたくし
 は此処へ来る時の外はいつも帽子をかぶり馴れているので、風に
 吹きつけられたと思うと同時に、片手を挙げて見て始て帽子のな
 いのに心づき、覚えす苦笑を浮べた。奉納のほりさおの幟は竿も折れるばか
 り、路地口に屋台を据えたおでん屋の納簾と共にちぎれて飛びそ
 うに閃ひらめくき翻がえっている。溝の角の無花果いちじくと葡萄ぶどうの葉は、廃屋のかけ
 になつた闇の中にがさがさと、既に枯れたような響を立てている。
 表通りへ出ると、俄に広く打仰がれる空には銀河の影のみならず、
 星という星の光のいかにも森然として冴さえ渡わたっているのが、言知
 れぬさびしさを思わせる折も折、人家のうしろを走り過る電車の

音と警笛の響とが烈風にかすれて、更にこの寂しさを深くさせる。わたくしは帰りの道筋を、白髯橋の方取る時には、いつも隅田町郵便局の在るあたりか、又は向島劇場という活動小屋のあたりから勝手に横道に入り、陋巷ろうこうの間を迂曲うきよくする小道を辿りたどつて、結局白髯明神の裏手へ出るのである。八月の末から九月の初めにかけては、時々夜になって驟雨ゆうだちの霽はれた後、澄みわたった空には明月が出て、道も明るく、むかしの景色も思出されるので、知らず知らず言問ことといの岡あたりまで歩いてしまうことが多かったが、今夜はもう月もない。吹き通す川風も忽ち肌寒くなって来るので、わたくしは地蔵坂の停留場に行きつくが否や、待合所の板バメと地蔵尊との間に身をちぢめて風をよけた。

十

四五日たつと、あの夜をかぎりもう行かないつもりで、秋裕の代まで置いて来たのにも係らず、何やらもう一度行つて見たい気がして来た。お雪はどうしたかしら。相変らず窓に坐っている事はわかりきつていながら、それとなく顔だけ見に行きたくて堪らない。お雪には気がつかないように、そつと顔だけ、様子だけ覗いて来よう。あの辺をひとまわ一巡りして帰つて来れば隣のラディオも止む時分になるのであると、罪をラディオに塗付けて、わたくしはまたもや墨田川を渡つて東の方へ歩いた。

路地に入る前、顔をかくす為、烏打帽を買い、素見客ひやかしが五六人
来合すのを待つて、その人達の蔭に姿をかくし、溝こなたの此方からお
雪の家を窺のぞいて見ると、お雪は新形の鬘を元のつぶしに結い直し、
いつものように窓に坐っていた。と見れば、同じ軒の下の右側の
窓はこれまで閉めきつてあつたのが、今夜は明くなって、燈影ほかげの
中に丸鬘の顔が動いている。新しい抱かかえ——この土地では出方でかたさん
とかいうものが来たのである。遠くからで能くはわからないが、
お雪よりは年もとつていらしく容貌きりようもよくはないようである。
わたくしは人通りに交つて別の路地へ曲つた。

その夜はいつもと同じように日が暮れてから急に風が凩ないで蒸
暑くなつた為ためか、路地の中の人出もまた夏の夜のように夥おびただしく、

曲る角々は身を斜めにしなければ通れぬ程で、流れる汗と、息苦しさとに堪えかね、わたくしは出口を求めて自動車の走せちがう
 広小路へ出た。そして夜店の並んでいない方の舗道を歩み、実は
 そのまま帰るつもりで七丁目の停留場に佇立んで額の汗を拭った。
 車庫からわずか一二町のところなので、人の乗っていない市営バス
 があたかもわたくしを迎えるように来て停った。わたくしは舗
 道から一歩踏み出そうとして、何やら急にわけもわからず名残
 惜しい気がして、又ぶらぶら歩き出すと、間もなく酒屋の前の曲
 がりかど
 角 にポストの立っている六丁目の停留場である。ここには五
 六人の人が車を待っていた。わたくしはこの停留場でも空しく三
 四台の車を行き過ぎさせ、唯茫然として、白楊樹の立ちならぶ表

通と、横町の角に沿うた広い空地の方を眺めた。

この空地には夏から秋にかけて、ついこの間まで、初めは曲馬、次には猿芝居、その次には幽霊の見世物小屋が、毎夜さわがしく蓄音機を鳴し立てていたのであるが、いつの間にか、もとのようになつて、あたりの薄暗い灯影が水溜の面に反映しているばかりである。わたくしはとにかくもう一度お雪をたずねて、旅行をするからとか何とか言つて別れよう。其の方が鼪の道を切つたような事をするよりは、どうせ行かないものなら、お雪の方でも後々の心持がわるくないであろう。出来ることなら、真の事情を打明けてしまいたい。わたくしは散歩したいにも其処がない。尋ねたいと思う人は皆先に死んでしまった。風流絃歌の巷も今で

は音楽家と舞踊家との名を争う処で、年寄が茶を啜^{すす}つてむかしを語る処ではない。わたくしは凶らずも此のラビラントの一隅に於いて浮世^{ふせいはんじつ}半日の閑を偷^{ぬす}む事を知った。そのつもりで邪魔でもあらうけれど折々遊びに来る時は快く上げてくれと、晩^{おそまき}蒔ながらわかるように説明したい……。わたくしは再び路地へ入ってお雪の家の窓に立寄った。

「さア、お上んなさい。」とお雪は来る筈の人が来たという心持を、其様子と調子とに現したが、いつものように下の茶の間には通さず、先に立って梯子^{はしご}を上るので、わたくしも様子を察して、

「親方が居るのか。」

「ええ。おかみさんも一緒……。」

「新奇のが来たね。」

「御飯焚たきのぼアやも来たわ。」

「そうか。急に賑かになつたんだな。」

「暫く独りでいたら、大勢だと全くうるさいわね。」急に思出したらしく、「この間ありがとう。」

「好いいのがあつたか。」

「ええ。明日あしたあたり出来てくる筈よ。伊達締だてじめも一本買ったわ。こ

れはもうこんななもの。後で下へ行つて持つてくるわ。」

お雪は下へ降りて茶を運んで来た。姑しばらく窓に腰をかけて何とも

つかぬ話をしていたが、主人あるじ夫婦は帰りそうな様子もない。その

中梯子うちの降口おりぐちにつけた呼鈴が鳴る。馴染の客が来た知らせであ

る。

家の様子うちが今までお雪一人の時とは全くちがつて、長くは居られぬようになり、お雪の方でもまた主人の手前を気兼しているらしいので、わたくしは言おうと思つた事もそのまま、半時間とはたたぬ中戸口うちを出た。

四五日過ると季節は彼岸に入った。空模様は俄にわかに變つて、南風なんぷうに追われる暗雲の低く空を行き過る時、大粒の雨は礫つぶてを打つように降りそそいでは忽たちまち歇やむ。夜を徹して小息おやみもなく降りつづくこともあつた。わたくしが庭の葉雞頭は根もとから倒れた。萩の花は葉と共に振り落され、既に実を結んだ秋海堂しゅうかいどうの紅い茎は大きな葉を剥はがれて、痛ましく色が褪あせてしまった。濡れた

木の葉と枯枝とに狼藉ろうぜきとしてゐる庭のさまを生き残つた法師ほうしぜ
 蟬みと蟋こおろぎ蟀せむしとが雨の霽はれま霽はれまに嘆とむらき弔とむらうばかり。わたくし
 は年々秋風秋雨に襲のちわれた後の庭を見るたびたび紅樓夢こうろうむの中に
 ある秋窓風雨しゅうそうふうう夕ゆうと題べされた一篇の古詩を思起す。

秋花惨淡秋草黄。

耿耿秋燈秋夜長。

已賞秋窓秋不尽。

那堪風雨助淒涼。

助秋風雨來何速。

驚破秋窓秋夢綠。

.....

そして、わたくしは毎年同じように、とても出来ぬとは知りながら、何とかうまく翻訳して見たいと思わづらい煩うのである。

風雨の中に彼岸は過ぎ、天気がからりと晴れると、九月の月も残り少く、やがて其年の十五夜になった。

前の夜もふけそめてから月が好かったが、十五夜の当夜には早くから一層曇りのない明月を見た。

わたくしがお雪の病んで入院していることを知ったのは其夜である。雇婆から窓口で聞いただけなので、病の何であるのかも知る由がなかった。

十月になると例年よりも寒さが早く来た。既に十五夜の晩にも玉の井いなり稻荷の前通の商店に、「皆さん、障しょうじ子張りかえの時が来

ました。サービスに上等の糊を進呈。」とかいた紙が下つていたではないか。もはや素足に古下駄を引摺り帽子もかぶらず夜歩きをする時節ではない。隣家となりのラデイオも閉めた雨戸に遮さえぎられて、それほどわたくしを苦しめないようになったので、わたくしは家に居てもどうやら燈火に親しむことができるようになった。

*

*

*

ほくとうきたん

東綺譚はここに筆を擱おくべきであろう。然しながら若しこ

こに古風な小説的結末をつけようと欲するならば、半年或是一年の後、わたくしが偶然思いがけない処で、既に素人しろうとになっている

お雪に廻り逢う一節を書添えればよいであろう。猶又、この偶然の邂逅かいこうをして更に感傷的ならしめようと思つたなら、摺れちがう自動車とか或は列車の窓から、互に顔を見合しながら、言葉を交したくにも交すことの出来ない場面を設ければよいであろう。楓葉荻花秋は瑟瑟しつしつたる刀禰河あたりの渡船わたしぶねで摺れちがう処などは、殊に妙であろう。

わたくしとお雪とは、互に其本名も其住所をも知らずにしまつた。唯 東の裏町、蚊のわめく溝際どぶぎわの家で狎れなしたしんだばかり。一たび別れてしまえば生涯相逢うべき機会も手段もない間柄である。軽い恋愛の遊戯とは云いながら、再会の望みなき事を初めから知りぬいていた別離の情は、強しいて之これを語ろうとすれば誇張に

陥り、之を輕々けいけいに叙し去れば情を尽さぬ憾みうらがある。ピエール
ロツチの名著阿菊おきくさんの末段は、能く這般しやはんの情緒を描き尽し、
人をして暗涙を催さしむる力があつた。わたくしが東綺譚の一
篇に小説的色彩を添加しようとしても、それは徒いたずらにロツチの筆を
学んで至らざるの笑を招くに過ぎぬかも知れない。

わたくしはお雪が永く溝際れんかの家こびにいて、極めて廉価れんかに其媚こびを売
るものでない事は、何のいわれもなく早くから之を予想していた。
若い頃、わたくしは遊里の消息に通曉した老人から、こんな話を
きかされたことがあつた。これほど氣に入つた女はない。早く話
をつけないと、外のお客に身受けをされてしまひはせぬかと思う
ような氣がすると、其女はきつと病氣で死ぬか、そうでなければ

突然厭いやな男に身受をされて遠い国へ行つてしまふ。何の訳もない
 氣病みというものは不思議に当るものだと言ふ話である。

お雪はあの土地の女には似合わしからぬ容色と才智とを持つて
 いた。雞けいぐん群のいっかく一鶴であつた。然し昔と今とは時代がちがうか
 ら、病むとも死ぬような事はあるまい。義理にからまれて思わぬ
 人に一生を寄せる事もあるまい……。

建込んだ汚きたならしい家の屋根つづき、風雨あらしの来る前の重苦しい空
 に映る燈影ほかげを望みながら、お雪とわたくしとは真暗な二階の窓に
 倚よつて、互に汗ばむ手を取りながら、唯それともなく謎なぞのような
 事を言つて語り合つた時、突然閃き落ちる稲妻に照らされたその
 横顔。それは今も猶ありありと目に残つて消去らずにいる。わた

くしは二十はたちの頃から恋愛の遊戯ふけに耽ふけつたが、然し此の老境に至つて、このような癡夢ちむを語らねばならないような心持になろうとは。運命の人を擲揄やゆすることもまた甚しいではないか。草稿の裏には猶数行の余白がある。筆の行くまま、詩だか散文だか訳のわからぬものを書しるして此夜の愁うれいを慰めよう。

残る蚊に額さされしわが血汐。

ふところ紙に

君は拭いて捨てし庭の隅。

葉雞頭ひとくきの一茎立ちぬ。

夜ごとの霜のさむければ、

夕暮の風をも待たで、

倒れ死すべき定めも知らず、

錦なす葉の萎しおれながらに

色増す姿ぞいたましき。

病める蝶ありて

傷きずきし翼つによるめき、

返かえり咲く花とうたがう鶏頭の

倒れ死すべきその葉かげ。

宿かる夢も

結ぶにひまなきおそあき晩秋の

たそがれ迫る庭の隅。

君とわかれしわが身ひとり、
倒れ死すべき雞頭の一茎と
ならびて立てる心はいかに。

丙ひのえね子
十月三十日脱稿

作後贅言ぜいげん

向島寺島町に在る遊里の見聞記けんもんきをつくつて、わたくしは之を東綺譚と命名した。

の字は林述齋が墨田川を言いい現あらわすために濫みだりに作ったもので、その詩集には 上漁謡と題せられたものがある。文化年代のことである。

幕府瓦解の際、成島柳北が下谷和泉橋いずみはしどおりの賜邸していを引払い、向島須崎村すさきむらの別荘を家となしてから其詩文には多く の字が用い出された。それから 字が再びあまね汎く文人墨客ぼっかくの間に用いられ

るようになったが、柳北の死後に至つて、いつともなく見馴れぬ字となつた。

物徂徠は墨田川を澄江となしていたように思っている。天明の頃には墨田堤を葛坡かつはとなした詩人もあつた。明治の初年詩文の流行を極めた頃、小野湖山は向島の文字を雅馴がじゆんならずとなし、其音によつて夢香洲むかうしゆうの三字を考出したが、これも久しからずして忘れられてしまった。現時向島の妓街に夢香荘とよぶ連込宿がある。小野湖山の風流を襲ぐ心であるのかどうか、未だ詳いままびらかにするを得ない。

寺島町五丁目から六七丁目にわたつた狭斜の地は、白髯橋しらひげばしの東方四五町のところに在る。即ち墨田堤の東北に在るので、上

となすには少し遠すぎるような気がした。依よつてわたくしはこれを 東と呼ぶことにしたのである。東綺譚はその初め稿を脱した時、直ただちに地名を取って「玉の井ぞうし雙紙」と題したのであるが、後に聊いささか思うところがあつて、今の世には縁遠い 字を用いて、殊更に風雅をよそおわたたのである。

小説の命題などについても、わたくしは十余年前井上唾いのうえあし々子を失い、去年の春 神代帚葉翁こうじろそうようおうの訃ふを聞いてから、爾来じらい全く意見を問うべき人がなく、又それ等について諧語かいごする相手もなくなつてしまった。東綺譚は若し帚葉翁が世に在るの日であつたなら、わたくしは稿を脱するや否や、直に走つて、翁を千駄木町せんだぎまちの寓ぐうき居よに訪おとい其閲読おとなを煩わづらさねばならぬものであつた。何故なにゆえかとい

うに翁はわたくしなどより、ずっと早くからかのラビラントの事情に通曉し、好んで之を人に語っていたからである。翁は坐中の談話がたまたまその地の事に及べば、まず傍人より万年筆を借り、バットの箱の中身を抜き出し、其裏面に市中より迷宮に至る道路の地図を描き、ついで路地の出入口を記し、その分れて那边に至り又那边に合するかを説明すること、たなごころさ掌を指すが如くであつた。

そのころ、わたくしは大抵毎晩のように銀座尾張町の四ツ角で翁に出逢つた。翁は人を待合すのにカフェーや喫茶店を利用しない。待設けた人が来てから後、話をする時になつて初めて飲食店の椅子に坐るのである。それまでは康衢こうくの一隅に立ち、時間を測つて、逢うべき人の来るのを待っているのであるが、その予測に

反して空しく時を費すことがあつても、翁は決して怒りもせず悲しみもしない。翁の街頭に佇立たたずむのは約束した人の来るのを待つためばかりではない。寧むしろこれを利用して街上の光景を眺めることを喜んでいたからである。翁が生前しばしば屢わたくしに示した其手帳には、某年某月某日の条下に、某処に於いて見る所、何時より何時までの間、通行の女およ凡そ何人の中洋装をなすもの幾人。女給らしきものにして檀那だんならしきものと連立つて歩むもの幾人。物貰い門かどどどづけ附幾人などと記してあつたが、これ等は町の角や、カフエーの前まへの樹の下などに立たずんで人を待っている間に鉛筆を走はしたものである。

今年残暑の殊はなはだに甚しかつた或夜、わたくしは玉の井稻荷前の横

町を歩いていたら時、おでん屋か何かの暖簾のれんの間から、三味線を抱えて出て来た十七八の一寸顔立ちよつとのいい門附から、「おじさん。」と親しげに呼びかけられた事があった。

「おじさん、こつちへも遊びに来るのかい。」

初めは全く見忘れていたが、門附の女の糸切歯を出して笑う口元から、わたくしは忽ちたちま四五年前、銀座の裏町で帚葉翁と共にこの娘とはなしをした事があったのを思出した。翁は銀座から駒込の家に帰る時、いつも最終の電車を尾張町の四辻か銀座三丁目の松屋前で待っている間、同じ停留場に立っている花売、辻占つじうらうり売、門附などと話をする。車に乗ってから相手も避けなにかぎり話をしつづけるので、この門附の娘とは余程前から顔を知り合っ

いたのであった。

門附の娘はわたくしが銀座の裏通りで折々見掛けた時分には、

まだ肩^{かたあげ}揚をして三味線を持たず、左右の手に四^{よつだけ}竹を握っていた。

髪は桃^{ももわれ}割に結い、黒襟^{えり}をかけた袂^{たもと}の長い着物に、赤い半襟。

赤い帯をしめ、黒塗の下駄の鼻緒も赤いのをかけた様子は、女義

太夫の弟子でなければ、場末の色町の半玉のようにも見られた。

細^{ほそおもて}面^{おもて}のませた顔立から、首や肩のほっそりした身体^{からだ}つきもま

たそういう人達に能^よく見られる典型的なものであった。その生立

や性質の型通りであるらしいことも、また恐らくは問うに及ばぬ

ことであろう。

「すっかり、姉^{ねえ}さんになっちまったな。まるで芸^{げい}者^{しや}衆^{しゆ}だよ。」

「ほほほほほ、おかしか無い。」と言いながら娘は平打ひらうちの簪かんざしを島田の根元にさし直した。

「おかしいものか。お前も銀座仕込じゃないか。」

「でも、あたゐ、もう彼方あつちへは行かないんだよ。」

「こつちの方がいいか。」

「此方こつちだつて、何処だつて、いいことはないよ。だけれど、銀座はあぶれると歩いちや帰れないし、仕様がなからね。」

「お前、あの時分は柳島へ帰るのだったね。」

「ああ、今は請地うけじへ越したよ。」

「お腹なかがすいてるか。」

「いいえ、まだ宵よいの口だもの。」

銀座では電車賃をやった事もあつたので、其夜は祝儀五十銭を
 与えて別れた。その後一ト月ばかりたつて、また路端みちばたで出逢つ
 たことがあるが、間もなく夜露も追々肌寒くなって来たので、わ
 たくしはこの町へ散歩に来ることも次第に稀になった。しかしこ
 の町の最も繁昌するのは、夜風の身に沁しむようになってからだ
 云うから、あの娘もこの頃は毎夜かかさずふけ渡る町を歩いて
 るのであろう。

*

*

*

帚葉翁そうようおうとわたくしとが、銀座の夜深よふけに、初めてあの娘の姿を

見た頃と、今年凶らず寺島町の路端でめぐり逢った時とを思合せると、歳月は早くも五年を過ぎてゐる。この間に時勢の変つたことは、半玉のような此娘の着物の肩揚げがとれ、桃割が結綿ゆいわたをかけた島田になつた其変りかたとは、同じ見方を以て見るべきものではあるまい。四竹を鳴して説経うたを唱つていた娘が、三味線をひいて流行唄はやりうたを歌う姉さんになつたのは、子ぼうふりが蚊になり、オボコがイナになり、イナがボラになつたと同じで、これは自然の進化である。マルクスを論じていた人が朱子学を奉ずるようになったのは、進化ではなくして別の物に変わったのである。前の者は空くうとなり、後の者は忽然こっぜんとして出現したのである。やどり蟹かにの殻の中に、蟹ではない別の生物が住んだようなものである。

われわれ東京の庶民が満洲の野やに風雲の起つた事を知つたのは其の前の年、昭和五六年の間であつた。たしかその年の秋の頃、わたくしは招魂社境内の銀いちよう杏の樹に三日ほどつづいて雀合戦のあつた事をきいて、その最終の朝こうじまち麴町の女達と共に之を見に行つたことがあつた。その又前の年の夏には、赤坂見附の濠ほりに、深更人の定さだまつた後、大きな蝦がま蟄が現れ悲痛な声を揚げて泣くという噂が立ち、或新聞の如きは蝦蟄を捕えた人に金参百円の賞を贈ると云う広告を出した。それが為め雨の降る夜などには却かえつて人出が多くなつたが、賞金を得た人の噂も遂に聞かず、いつの間にかこの話は烟けむりのように消えてしまつた。

雀合戦を見た其年も忽ち暮に迫つた或日の午後、わたくしは葛か

さいむら　うみべ
 西村の海辺を歩いて道に迷い、日が暮れてから燈火を目当にし
 て漸く船堀橋ふなぼりばしの所在を知り、二三度電車を乗りかえた後、洲崎
 の市電終点から日本橋の四辻に來たことがあつた。深川の暗い町
 を通り過ぎた電車から、白木屋百貨店の横手に降りると、燈火の
 明るさと年の暮の雑沓ざつとろと、ラデイオの軍歌とが一団になつて、
 今日の日半日も夜になるまで、人跡じんせきの絶えた枯蘆かれあしの岸ばかりさ
 まよつていたわたくしの眼には、忽然こつぜん異様なる印象を与えた。
 またしても乗換の車を待つため、白木屋の店頭たたずに佇立むと、店の
 窓には、黄色の荒原の処ところどころ々々に火の手の上つている背景を飾り、
 毛衣けいもで包んだ兵士の人形を幾個いくつとなく立て並べてあつたのが、
 これ又わたくしの眼を驚した。わたくしは直ただちに、街上に押合う群

集の様子に眼を移したが、それは毎年まいとしの歳暮に見るものと何の
 変りもなく、殊更に立止って野營の人形を眺めるものはないらし
 いようであつた。

銀座通に柳の苗木が植えつけられ、両側の歩道に朱骨しゅぼねの雪ぼんぼ
 洞りが造り花の間に連ねともされ、銀座の町が宛さなら田舎芝居の仲なか
 の町ちやうの場と云うような光景を呈し出したのは、次の年の四月ごろ
 であつた。わたくしは銀座に立てられた朱骨のぼんぼりと、赤坂
 溜池ためいけの牛肉屋の欄干が朱で塗られているのを目にして、都人とじんの
 趣味のいかに低下きたし来つたかを知つた。霞ヶ関の義拳が世を震動
 させたのは柳まつりの翌あくるつき月であつた。わたくしは丁度其夕ゆう、
 銀座通を歩いていたので、この事を報道する号外の中では読売新

聞のものが最も早く、朝日新聞がこれについてだことを目撃した。時候がよく、日曜日^に当つていたので、其夕銀座通はおびただしい人出であつたが電信柱に貼付け^{はりつ}られた号外を見ても群集は何等特別の表情を其面上に現さぬばかりか、一語のこれについて談話をするものもなく、唯露店の商人が休みもなく兵器の玩具に螺^{ぜんま}旋^いをかけ、水出しのピストルを乱射しているばかりであつた。

帚葉翁が古帽子をかぶり日光下駄をはいて毎夜かかさず尾張町の三越前に立ち現れたのはその頃からであつた。銀座通の裏表に処^{えら}を扱ばず蔓^{まんえん}衍したカフェーが最も繁昌し、又最も淫卑^{いんび}に流れたのは、今日^{こんにち}から回顧すると、この年昭和七年の夏から翌年にかけてのことであつた。いずこのカフェーでも女給を二三人店口

に立たせて通行の人を呼び込ませる。裏通のバアに働いている女達は必ず二人ずつ一組になつて、表通を歩み、散歩の人の袖を引いたり目まぜで誘いざなつたりする。商店の飾かざりつけ付を見る振りをして立留り、男一人の客と見れば呼びかけて寄添い、一緒にお茶を飲みに行こうと云う怪し気な女もあつた。百貨店でも売子の外に大勢の女を雇入れ、海水浴衣を着せて、女の肌身を衆人の目前まへに曝さらさせるようにしたのも、たしかこの年から初まつたのである。裏通の角々にはヨウヨウとか呼ぶ玩具を売る小娘の姿を見ぬ事はなかつた。わたくしは若い女達が、其の雇主の命令に従つて、其の顔と其の姿とを、或は店先、或は街上に曝さらすことを恥とも思わず、中には往々得意らしいのを見て、公娼の張はりみせ店が復興したような

思をなした。そして、いつの世になつても、女を使役するには変らない一定の方法がある事を知つたような気がした。

地下鉄道は既に京橋の北詰まで開鑿かいさくせられ、銀座通には昼夜の別なく地中に鉄棒を打込む機械の音がひびきわたり、土工は商店の軒下に処嫌おんなきようしわず昼寝をしていた。

月島小学校の女教師おんなきようしが夜になると銀座一丁目裏のラバサンと云うカフェーに女給となつて現れ、売春かたわらの傍枕かたわらさがしをして捕えられた事が新聞の紙上を賑にぎわした。それはやはりこの年昭和七年の冬であつた。

*

*

*

わたくしが初て帚葉翁と交を訂まじわりただしたのは、大正十年の頃である。その前から古本の市いちへ行くごとに出逢っていたところから、いつともなく話をするようになっていたのである。然し其後も会うところは相変らず古本屋の店先で、談話は古書に関することばかりであったので、昭和七年の夏、偶然銀座通で邂かい逅こうした際には、わたくしは意外の地で意外な人を見たような気がした為、其夜は立たち談ばなしをしたまま別れたくらいであった。

わたくしは昭和二三年のころから丁度其時分まで一時全く銀座からは遠のいていたのであったが、夜眠られない病気が年と共に烈しくなった事や、自炊に便利な食料品を買う事や、また夏中は

隣家となりのラデイオを聞かないようにする事や、それ等のためにまたしても銀座へ出かけはじめたのであるが、新聞と雑誌との筆ひつちゆ誅うを恐れて、裏通を歩くにも人目を忍び、向むこうの方から頭髪を振乱した男が折革包おりかばんをぶら下げたり新聞雑誌を抱えたりして歩いて来るのを見ると、横町へ曲つたり電柱のかげにかくれたりしていた。

帚葉翁はいつも白足袋たびに日光下駄をはいていた。其風采ふうさいを一見しても直ただちに現代人でない事が知られる。それ故、わたくしが現代文士を忌み恐れている理由をも説くに及ばずして翁は能く之を察していた。わたくしが表通のカフエーに行くことを避けている事情をも、翁はこれを知っていた。一夜翁いちやがわたくしを案内して、

西銀座の裏通にあつて、殆ど客の居ない万茶亭ばんさていという喫茶店へつれて行き、当分その処を会合処にしようと言つたのも、わたくしの事情を知つていた故であつた。

わたくしは炎暑の時節いかに渴かつする時と雖いえども、氷を入れた淡水の外冷いものは一切口にしない。冷水も成るべく之を避け夏も冬と変りなく熱い茶か珈琲コーヒーを飲む。アイスクリームの如きは帰朝以来今日まで一度も口にした事がないので、若もし銀座を歩く人の中で銀座のアイスクリームを知らない人があるとしたなら、それは恐らくわたくしいちにん一人のみであろう。翁がわたくしを万茶亭に案内したのもまたこれが為であつた。

銀座通のカフェーで夏になつて熱い茶と珈琲とをつくる店は殆

ど無い。西洋料理店の中でも熱い珈琲をつくらない店さえある。紅茶と珈琲とはその味の半はあじわな香気に在るので、若し氷で冷却すれば香氣は全く消失きえうせてしまう。然るに現代の東京人は冷却して香氣のないものでなければ之を口にしない。わたくしの如き旧弊きゆうへ人いじんにはこれが甚だ奇風に思われる。この奇風は大正の初にはまだ一般には行きわたっていなかった。

紅茶も珈琲も共に洋人の持ち来つたもので、洋人は今こんにち日と雖その冷却せられたものを飲まない。これを以て見れば紅茶珈琲の本来の特性は暖きにあるや明あきらである。今之を邦俗に従つて冷却するのは本来の特性を破損するもので、それはあたかも外国の小説演劇を邦語に訳す時土地人物の名を邦化するものと相似ている。

わたくしは何事によらず物の本性ほんせいを傷けるきずつことを悲しむ傾があるから、外国の文学は外国のものとして之を鑑賞したいと思うように、其飲食物の如きもまた邦人の手によつて塩梅あんばいせられたものを好まないのである。

万茶亭は多年南米の殖民地に働いていた九州人が珈琲を売るために開いた店だという事で、夏でも暖い珈琲を売っていた。然し其主人あるじは帚葉翁と前後して世を去り、其店もまた閉とぎされて、今はない。

わたくしは帚葉翁と共に万茶亭に往く時は、狭い店の中の一つと蠅はえの多いのを恐れて、店先の並木の下に出してある椅子に腰をかけ、夜も十二時になって店の灯の消える時迄じつとしてい

る。家へ帰つて枕についても眠られない事を知っているので十二時を過ぎても猶行くべきところがあれば誘われるままに行くことを辞さなかつた。翁はわたくしと相對して並木の下に腰をかけている間に、万茶亭と隣接したラインゴルト、向側のサイセリヤ、スカール、オデツサなどいう酒場に入出する客の人数を数えて手帳にかきとめる。円タクの運転手や門附と近づきになつて話をする。それにも飽きると、表通へ物を買に行つたり路地を歩いたりして、戻つて来ると其の見て来た事をわたくしに報告する。今、どこの路地で無頼漢が神祇の礼を交していたとか、或は向の川岸で怪し気な女に袖を牽かれたとか、曾てどこそこの店にいた女給が今はどこそこの女主人になつていたりとか云う類のはなしであ

る。寺島町の横町でわたくしを呼止めた門附の娘も、初めて顔を見知ったのはこの並木の下であつたに違ひはない。

わたくしは翁の談話によつて、銀座の町がわずか三四年見ない間にすっかり變つた、其景況の大略を知ることができた。震災前表通に在つた商店で、もとの処に同じ業をつづけているものは数えるほどで、今は悉くことごと関西もしくは九州から来た人の経営に任ねられた。裏通の到る処に海豚汁ふぐじるや関西料理の看板がかけられ、横町の角々に屋台店の多くなつたのも怪しむには当らない。地方の人が多くなつて、外で物を食う人が増加したことは、いずこの飲食店も皆繁昌している事がこれを明にしている。地方の人は東京の習慣を知らない。最初停車場構内の飲食店、また百貨店の食堂

で見覚えた事は悉く東京の習慣だと思込んでいたので、汁粉屋の看板を掛けた店へ来て支那蕎麦そばがあるかときき、蕎麦屋に入つててんぷらあつら天麩羅を誂え断られて訝いぶかし気な顔をするものも少くない。飲食店ガラスの硝子窓に飲食物の模型を並べ、之に価格をつけて置くようになったのも、蓋けだし已やむことを得ざる結果で、これまた其範そのはんを大阪に則とつたものだという事である。

街に灯ひがつき蓄音機の響が聞え初めると、酒気を帯びた男が四五人ずつ一組になり、互に其腕を肩にかけ合い、腰を抱き合いして、表通といわず裏通といわず銀座中をひよろひよろさまよい歩く。これも昭和になつてから新あらたに見る所の景況で、震災後しきり頻にカフエーの出来はじめた頃にはまだ見られぬものであつた。わたく

しは此不体裁にして甚だ無遠慮な行動の原因するところを詳つまびらにしないのであるが、其実例によつて考察すれば、昭和二年初めて三田の書生及三田出身の紳士が野球見物の帰り群ぐんをなし隊をつくつて銀座通を襲つた事を看過するわけには行かない。彼等は酔えいに乗じて夜店の商品を踏み壊し、カフエーに乱入して店内の器具のみならず家屋にも多大の損害を与え、制御の任に当る警吏と相争うに至つた。そして毎年二度ずつ、この暴行は繰返されて今日に及んでいる。わたくしは世の父兄にして未いまだ一人の深く之を憤り其子弟をして退学せしめたもののある事を聞かない。世は挙こぞつて書生の暴行を以て是ぜとなすものらしい。曾てわたくしも明治大正の交、乏ぼうを承うけて三田に教きよう鞭べんを把とつた事もあつたが、早く辞

して去つたのは幸であつた。そのころ、わたくしは経営者中の一人ちんから、三田の文学も稲門とうもんに負けないように尽力していただき、ひそきたいと言われて、その愚劣なるに眉を顰めたこともあつた。彼等は文学芸術を以て野球と同一に視ていたのであつた。

わたくしは元來その習癖よりして党を結び群をなし、其威を借りて事をなすことを欲しない。むしろ之を怯きようとなして排しりぞけている。治国の事はこれを避けて論外おに措く。わたくしは芸林に遊ぶものの往々社を結び党を立てて、己おのれくみに与するを揚げ与せざるを抑えようとするものを見て、之を怯ろとなすのである。その一例を挙げれば、曾て文藝春秋社の徒が、築地小劇場の舞台にその党の作品の上演せられなかつた事を含み、小山内薫おさないかおるの抱ける劇

文学の解釈を以て誤れるものとなした事の如きを言うのである。

鴻雁こうがんは空を行く時列をつくつておのれを護ることに努めてい

るが、鶯うぐいすは幽谷を出でて喬木きようぼくに遷うつらんとする時、群ぐんをもなさ

ず列をもつくらない。然も猶鴻雁は獵者りようしゃの砲火を逃のがるること

ができないではないか。結社は必ずしも身を守る道とは言えない。

婦女子の媚こびを売るものに就ついて見るも、また団結を以て安全と

なすものと、孤影こかげ悄しょうぜん然ぜんとして猶且つ悲しまざるが如きものも

ある。銀座の表通に燈火を輝すカフエーを城郭となし、赤組と云

い白組と称する団体を組織し、客の纏頭てんとうを貪むさぼるものは女給の群むれ

である。風呂敷包をかかえ、時には雨傘を携え、夜店の人ごみに

まぎれて窃ひそかに行こうじん人の袖を引くものは独立の街娼である。この両

者は其外すこぶる見頗異る所があるが、その一たび警吏に追跡せらるるや、危難のその身に達することには何の差別もないのであろう。

*

*

*

今年昭和十一年の秋、わたくしは寺島町へ行く道すがら、浅草橋辺で花電車を見ようとする人達が路みちばた傍かきに堵をなしているのに出逢った。気がつくくと手にした乗車切符がいつもよりは大形になつて、市電二十五周年記念とかしてあつた。何か事のある毎に、東京の街路には花電車というものが練り出される。今より五年前、帚葉翁と西銀座万茶亭に夜をふかし馴れた頃、秋も既に彼岸を過

ぎていたかも知れない。給仕人から今しがた花電車が銀座を通つたことを聞いた。そして、其夜の花電車は東京府下の町々が市内に編入せられたことを祝うためであつた事をも見て来た人から聞き伝えたのであつた。是^{これ}より先、まだ残暑のさり切らぬころ、日比谷の公園に東京音頭と称する公開の舞踏会が挙行せられたことをも、わたくしはやはり見て来た人から聞いたことがあつた。

東京音頭は郡部の地が市内に合併し、東京市が広くなつたのを祝するために行われたように言われていたが、内情は日比谷の角にある百貨店の広告に過ぎず、其店で揃^{そろ}いの浴衣^{ゆかた}を買わなければ入場の切符を手に入れることができないとの事であつた。それはとにかく、東京市内の公園で若い男女の舞踏をなすことは、これ

まで一たびも許可せられた前例がない。地方農村の盆踊さえたしか明治の末頃には県知事の命令で禁止せられた事もあつた。東京では江戸のむかし山の手の屋敷町に限つて、田舎から出て来た奉公人が盆踊をする事を許されていたが、町民一般は氏神の祭礼にきようほん狂奔するばかりで盆に踊る習慣はなかつたのである。

わたくしは震災前、ぜん毎夜帝国ホテルに舞踏の行われた時、愛国の志士が日本刀を振つて場内に乱入した為、ふる其後舞踏の催しは中止となつた事を聞いていたので、日比谷公園に公開せられた東京音頭の会場にも何か騒ぎが起りはせぬかと、内心それを期待していたが、何事も無く音頭の踊は一週間の公開を終つた。

「どうも、意外な事だね。」とわたくしは帚葉翁を顧て言つた。

翁は薄鬚うすひげを生はやした口元に笑を含ませ、

「音頭とダンスとはちがうからでしょう。」

「しかし男と女が大勢一緒になって踊るのだから、同じ事じゃないですか。」

「それは同じだが、音頭の方は男も女も洋服を着ていない。浴衣をきているからいいのでしょうか。肉体を露出しないからいいのでしょうか。」

「そうかね、しかし肉体を露出する事から見れば、浴衣の方があぶないじゃないですか。女の洋装は胸の方が露出されているが腰から下は大丈夫だ。浴衣は之とは反対なものですぜ。」

「いや、先生のように、そう理窟詰めにされてはどうにもならな

い。震災の時分、夜警団の男が洋装の女の通りかかるのを尋問した。其時何か癩しやくにさわる事を言つたと云うので、女の洋服を剥はぎ取つて、身体検査をしたとか、しないとか大騒ぎな事があつたです。夜警団の男も洋服を着ていた。それで女の洋装するのが癩しやくにさわると云うんだから理窟にはならない。」

「そういえば女の洋服は震災時分にはまだ珍しい方だつたね。今では、こうして往來を見ていると、通る女の半分は洋服になつたね。カフエー、タイガーの女給も二三年前から夏は洋服が多くなつたようですね。」

「武断政治の世になつたら、女の洋装はどうなるでしょう。」
「踊も浴衣ならいと云う流儀なら、洋装ははやらなくなるかも

知れませんか。然し今の女は洋装をよしたからと云つて、日本服を着こなすようにはならないと思いますよ。一度崩れてしまったら、二度好くなることはないですからね。芝居でも遊芸でもそうでしょう。文章だってそうじゃないですか。勝手次第にくずしてしまつたら、直そうと思つたつて、もう直りはしないですよ。」

「言文一致でも鴟外先生のものだけは、朗吟する事ができますね。」

帚葉翁は眼鏡をはずし両眼を閉じて、伊沢蘭軒が伝の末節を唱えた。「わたくしは学殖なきを憂うる。常識なきを憂えない。天下は常識に富める人の多きに堪えない。」

*

*

*

こんな話をしていると、夜は案外早くふけわたって、服部の時計台から十二時を打つ鐘の音が、其頃は何となく耳新しく聞きなされた。

考証癖の強い翁は鐘の音をきくと、震災前まで八官町に在った小林時計店の鐘の音が、明治のはじめには新橋八景の中にも数えられていた事などを語り出す。わたくしは明治四十四五年の頃には毎夜妓家の二階で女の帰って来るのを待ちながら、かの大時計の音に耳を澄した事などを思出すのであった。三木愛花の著した小説芸者節用などはなしも、わたくし達二人の間には屢語り出される事があった。

万茶亭の前の道路にはこの時間になると、女給や酔客の帰りを当込んで円タクが集つて来る。この附近の酒場でわたくしが其名を記憶しているのは、万茶亭の向側にはオデッサ、スカール、サイセリヤ、此方こなたの側にはムウランルージュ、シルバースリツパ、ラインゴルトなど。また万茶亭と素人屋しもたやとの間の路地裏にはルパン、スリイシスタ、シラムレンなど名づけられたものがあつた。今も猶在るかも知れない。

服部の鐘の音を合図に、それ等の酒場やカフェーが一斉に表の灯ひを消すので、街路まちは俄にわかに薄暗く、集つて来る円タクは客を載せても徒いたずらに喇叭らうぱを鳴すばかりで、動けない程込み合う中うち、運転手の喧嘩がはじまる。かと思うと、巡查の姿が見えるが早いか、一輛

残らず逃げ失せてしまおうが、暫くして又もとのように、その辺一帶をガソリン臭くしてしまふのである。

帚葉翁はいつも路地を抜け、裏通から尾張町の四ツ角に出で、既に一群をなして赤電車を待つている女給と共に路傍に立ち、顔馴染なしみのものがいると先方の迷惑をも顧ず、大きな声で話をしかける。翁は毎夜の見聞によつて、電車のどの線には女給が最も多く乗るか、又その行先は場末のどの方面が最も多いかという事を能く知っていた。自慢らしく其話に耽ふけつて、赤電車にも乗りそこなう事がたびたびであつたが、然しそういう場合にも、翁は敢て驚く様子もなく、却て之を幸とするらしく、「先生、少しお歩きになりませんか。その辺までお送りしましょう。」と言う。

わたくしは翁の不遇なる生涯を思返して、それはあたかも、待
 っていた赤電車を眼前に逸しながら、狼狽ろうばいの色を示さなかつた
 態度によく似ていたような心持がした。翁は郷里の師範学校を出
 て、中年にして東京に來り、海軍省文書課、慶応義塾図書館、書し
 肆よし一誠堂編へん輯しゅう部其他に勤務したが、永く其職に居ず、晩年は
 専もつぱら鉛えんざん槓に従事したが、これさえ多くは失敗に終つた。けれど
 も翁は深く悲しむ様子もなく、閑散の生涯を利用して、震災後市し
 井せいの風俗を觀察して自ら娯たのしみとしていた。翁と交るものは其悠
 々たる様子を見て、郷里には資産があるものと思つていたが、昭
 和十年の春俄に世を去つた時、其家には古書と甲かちちゅう胃いと盆栽と
 の外、一銭の蓄たくわえもなかつた事を知つた。

この年銀座の表通は地下鉄道の工事最中で、夜店がなくなる頃から、凄じい物音が起り、工夫の恐しい姿が見え初めるので、翁とわたくしとの漫歩は、一たび尾張町の角まで運び出されても、すぐさま裏通に移され、おのずから芝口の方へと導かれるのであった。土橋どばしか難波橋なにわばしかをわたって省線のガードをくぐると、暗い壁おもての面に、血盟団を釈放せよなど、不穏な語をつらねたいろいろの紙が貼つてあつた。其下にはいつも乞食が寝ている。ガードの下を出ると歩道の片側に、「栄養の王座」など書いた看板を出し、四角な水みず槽おけに鰻うなぎを泳がせ釣針を売る露店が、幾軒となく桜田本郷町の四ツ角ちかくまで続いて、カフェー帰りの女給や、近所の遊人らしい男が大勢集つている。

裏通へ曲ると、駐車場の改札口と向い合つた一ひとすじ条の路地があつて、其両側に鮓屋すしと小料理屋が並んでいる。その中には一軒わたくしの知つてゐる店もある。暖簾のれんに焼鳥金兵衛としるした家で、その女主人はおんなあるじ二十余年のむかし、わたくしが宗十郎町の芸者家に起臥してゐた頃、向側の家にいた名妓なにかしというものである。金兵衛の開店したのはたしか其年の春頃であるが、年々に繁昌して今は屋内を改築して見違えるようになってゐる。

この路地には震災後も待合や芸者家が軒をつらねてゐたが、銀座通にカフェーの流行はやり始めた頃から、次第に飲食店が多くなつて、夜半過に省線電車に乗る人と、カフェー帰りの男女とを目当に、大抵暁の二時ごろまで灯あかりを消さずにゐる。鮓屋すしの店が多いの

で、鮎屋横町とよぶ人もある。

わたくしは東京の人が夜半過ぎまで飲み歩くようになった其状況を眺める時、この新しい風習がいつ頃から起ったかを考えなければならぬ。

吉原遊ゆうかく廓かくの近くを除いて、震災前東京の町まち中じゆうで夜半過ぎで灯を消さない飲食店は、蕎麦屋そばより外はなかつた。

帚葉翁はわたくしの質問に答えて、現代人が深夜飲食の楽しみを覚えたのは、省線電車が運転時間を暁一時過ぎまで延長したことと、市内一円の札を掲げた辻自動車つじ自動車が五十銭から三十銭まで値下げをした事とに基くのだと言つて、いつものように眼鏡を取つて、その細い眼しばたを瞬したたきながら、「この有様を見たら、一部の道徳

家は大に慨嘆するでしょうな。わたくしは酒を飲まないし、なまぐ腥臭いものが嫌いですから、どうでも構いませんが、もし現代の風俗をきようせい矯正しようと思うなら、交通を不便にして明治時代のようにすればいいのだと思います。そうでなければ夜半過ぎてから円タクの賃金をグツト高くすればいいでしょう。ところが夜おそくなればなるほど、円タクは昼間の半分よりも安くなるのですからね。」

「然し今の世の中のこと、これまでの道徳や何かで律するわけに行かない。何もかも精力発展の一現象だと思えば、暗殺もかんい姦淫も、何があろうとさほど眉をしか顰めるにも及ばないでしょう。精力の発展と云ったのは慾望を追求する熱情と云う意味なんです。

スポーツの流行、ダンスの流行、旅行登山の流行、競馬其他ばくえ博き奕の流行、みんな慾望の発展する現象だ。この現象には現代固有の特徴があります。それは個人めいめいに、他人よりも自分の方が優れているという事を人にも思わせ、また自分でもそう信じたいと思っている——その心持です。優越を感じたいと思つてゐる慾望です。明治時代に成長したわたくしにはこの心持がない。あつたところで非常にすくないのです。これが大正時代に成長した現代人と、われわれとの違ふところですよ。」

円タクが喇叭を吹ふきなら鳴なしている路端みちばたに立つて、長い議論もしていられないので、翁とわたくしとは丁度三四人の女給が客らしい男と連立ち、向側の鮓屋に入ったのを見て、その後あとにつづいて

暖簾をくぐつた。現代人がいかなる処、いかなる場合にもいかに甚しく優越を争おうとしているかは、路地裏の鮓屋に於いても直ただちに之を見る事ができる。

彼等は店の内なかが込んでいると見るや、忽たちまち鋭い眼付になつて、

空席を見出すと共に人込みを押分けて驀ばくしん進する。物をあつらえ

るにも人に先さきんじようとして大声を揚げ、卓たくし子を叩き、杖で床を突

いて、給仕人を呼ぶ。中にはそれさえ待ち切れず立つて料理場を

窺のぞき、直接料理人に命令するものもある。日曜日に物見遊山ゆざんに出

掛け汽車の中の空席を奪うばい取ろうがためには、プラットホーム

から女子供を突落す事を辞さないのも、こういう人達である。戦

場に於て一番槍の手柄をなすのもこういう人達である。乗客の少

い電車の中でも、こういう人達は五月人形のように股またを八の字に開いて腰をかけ、取れるだけ場所を取ろうとしている。

何事をなすにも訓練が必要である。彼等はわれわれの如く徒歩して通学した者とはちがって、小学校へ通う時から雑沓ざつとうする電車に飛乗り、雑沓する百貨店や活動小屋の階段を上下して先を争うことに能よく馴ならされている。自分の名を売るためには、自ら進んで全級の生徒を代表し、時の大臣や顯官に手紙を送る事を少しも恐れていない。自分から子供は無邪気だから何をしてもよい、何をしても咎とがめられる理由はないものと解釈している。こういう子供が成長すれば人より先に学位を得んとし、人より先に職を求めんとし、人より先に富をつくろうとする。此努力が彼等の一生

で、其外には何物もない。

円タクの運転手もまた現代人の中のうち一人いちにんである。それ故わたくしは赤電車がなくなつて、家に帰るため円タクに乘ろうとするに臨んでは、漠然たる恐怖を感じないわけには行かない。成るべく現代的優越の感を抱いていないように見える運転手を捜さなければならぬ。必要もないのに、先へ行く車を追越そうとする意気込の無さそうに見える運転手を捜さなければならぬ。若しこれを怠るならばわたくしの名はたちまち翌日の新聞紙上に交通禍の犠牲者として書立てられるであらう。

*

*

*

くと、やはり毎年同じように、「老愁ハ葉ノ如ク掃ヘドモ尽キズ
 蔌蔌タル声中又秋ヲ送ル。」と言つたたちりゆうわん館柳湾えのきの句を心頭に思
 浮べる。その日の朝も、わたくしは此句をもくしやう黙誦しながら、寢
 間着のまま起たつて窓に倚よると、崖の榎えのきの黄ばんだ其葉も大方散つ
 てしまつた梢こずえから、鋭い百舌もずの声がきこえ、庭の隅に咲いた石蓐つわ
ぶききいろ花の黄い花に赤蜻蛉とんぼがとまっていた。赤蜻蛉は数知れず透明な其
 翼をきらきらさせながら青々と澄渡つた空にも高く飛んでいる。
さだま曇りがちであつた十一月の天気も二三日前の雨と風とにすつか
 り定つて、いよいよ「一年ノ好景君記取セヨ」と東坡とうばの言つたよ
 うな小春の好時節になつたのである。今まで、どうかすると、一
 筋二筋と糸のように残つて聞えた虫の音も全く絶えてしまつた。

耳にひびく物音は悉く昨日のものとは變つて、今年の秋は名残りもなく過ぎ去つてしまつたのだと思うと、寝苦しかつた残暑の夜の夢も涼しい月の夜に眺めた景色も、何やら遠いむかしの事であつたような気がして来る……年々見るところの景物に變りはない。年々變らない景物に対して、心に思うところの感懷もまた變りはないのである。花の散るが如く、葉の落るが如く、わたくしには親しかつた彼かの人々は一人一人相ついで逝いつてしまつた。わたくしもまた彼の人々と同じように、その後を追うべき時の既に甚しくおそくない事を知っている。晴れわたつた今日の天氣に、わたくしはかの人々の墓を掃はらいに行こう。落葉はわたくしの庭と同じように、かの人々の墓をも埋めつくしているであろう。

昭和十一年丙子十一月脱稿

青空文庫情報

底本：「※「#「さんずい+（壱一土へん一厂）」、第3水準1-8
7-25」東綺譚」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年12月25日発行

1978（昭和53）年4月10日40刷改版

2007（平成19）年1月15日79刷

入力：米田

校正：阿部哲也

2011年1月26日作成

2014年1月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

※ [#「さんずい+ (壠-土へん-厂)」、第3水準1-87-25] 東綺譚

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>